旅人（バックパッカー）が書き、旅人が読む、旅人のための旅ライフフリーペーパーマガジン

BraLi

Vol.7 1周年記念号

誌上写真展／テーマ「First Step 旅に出よう！」／旅先の変な日本語／Brali Biz「旅」×「ビジネス」／旅で使えるスマホアプリ／私がフィリピン英語留学をする理由／Chibirockの旅はくせもの
HANGOVER in the WORLD／旅人からの伝言「特集インド」／トホホな話／一本の糸で世界をつなぐチャリの旅／自炊派の手料理エッセイたびたべ／アジア漂流日記　他

Photo(C)鈴木 モト

広告

浅草
ASAKUSA

Khaosan Tokyo Guest House

http://www.khaosan-tokyo.com/ja/

日本で海外の気分を楽しめる！

カオサン東京ゲストハウスは、東京、京都、福岡、別府に計8つの店舗を展開しています。
国際交流をしたい！安く快適に泊まりたい！楽しくにぎやかに滞在したい方！
観光、就職活動、一人旅等、あらゆるお客様に満足していただける宿泊施設です。

TOKYO

- NINJA 1泊/2200円～
- ORIGINAL 1泊/2000円～
- SAMURAI 1泊/2500円～
- ANNEX & SMILE 1泊/2000円～
- KABUKI 1泊/3000円～

KYOTO 1泊/2000円～

BEPPU 1泊/2000円～

FUKUOKA 1泊/2400円～

http://www.khaosan-tokyo.com/ja/

THIS IS YOUR BACKPACKER LIFE.

旅人の数だけ違った
スタイルがあっていい。
これはあなたのバックパッカーライフです。

バックパッカーで旅をするって特別なことですか？あなたは旅バカですか？
もしアナタがクローゼットの中にあるバックパックに想いを馳せるなら「旅バカ」です。
苦楽を共にしてきた数々の相棒を捨てられずにいるなら、**間違いなく「旅バカ」です。**

残念なことにそれは **不治の病** です。一度目は衝撃の印度
2度目はうまくやれるナマステ　3度目はもう病気です！

バックパッカーの大好物, 最北端, 最南端, 最西端, 最東端, 赤道, 南北回帰線,
洞窟, 離島, そして僻地, 辺境, 秘境, 越境…
越境！ バックパッカーの妖しい与太話に散りばめられた真実、
そして名もなき旅人たちが残し受け継いできた、
数々のバックパッカー名言＆格言。
「金の北米、女の南米、耐えてアフリカ、歴史のアジア、何もないのがヨーロッパ、
問題外のオセアニア」放浪 流浪 徘徊 ジプシー ノマド ボヘミアン etc...
行った国の数はそんなに大切なのか？　世界一周って何ですか？　あのガイドブックの裏話。

J-Backpacker styleの系譜。

それは『何でも見てやろう』から始まった。結論のでないあの愛しきバックパッカー論の数々。
「日本人宿 / ガイドブック / 節約ビンボー旅 / 夜のパトロール」カニ族全盛期から時は刻まれ、
いまやバックパッカー3.0　爺ちゃんも両親も旅人の3世代目バックパッカー出現！
スマホ, Wi-Fi, LCC, ナチュラルボーン…デジタルネイティブで、ソーシャル・ヒッピーな
デジモンバックパッカーが闊歩する時代の到来。

こちら側の世界へようこそ。
バックパッカー新聞、
創刊です。

旅は変わっちまったのかい？
旅の環境や手法が変わっても、やっぱり旅は人との出逢いだ、やっぱり人が断然オモシロイ。
わたしたちは、そんなバックパッカー現役OB/OG、そしてこれからバックパックを担いで旅に出る仲間の**ベースキャンプ**となりたい。

Cominng soon.『バックパッカー新聞』　Published By Japan Backpackers Link 発行人 編集長 向井通浩

http://www.mag2.com/m/0001521550.html

CONTENTS

CONTENTS

■テーマ「First Step 旅に出よう！」
□未知なる道
□一歩踏み出す勇気
□リアルRPGの冒険
□今日が人生最後の日なら、今日することは自分がしたいことだろうか？
■旅先の変な日本語
■私がフィリピン英語留学をする理由
■Brali　Biz　「旅」×「ビジネス」　たびえもん
■旅で使えるスマホアプリ
■Chibirockの旅はくせもの
■HANGOVER in the WORLD
■旅人からの伝言　「特集 インド」
□インド旅行到着初日＊
□体験を持って理解すること
■エッセイ「旅トキドキ・・・」
■トホホな話
■一本の糸で世界をつなぐチャリの旅
■自炊派の手料理「丸々トマトの冷製スープ」
■エッセイたびたべ
■アジア漂流日記
■Brali Photo（誌上写真展）
■作者・情報提供者一覧
■編集後記
■次号予告
■記事募集

First Step

旅に出よう！

渡航歴の多いベテランや秘境を探すハードバックパッカー、はたまた昨日初めてのバックパッカー体験から帰ってきたヒヨコバックパッカー、誰でも初めの一歩がある。
理由も目的も無理に決めなくたっていい。とにかく旅に出よう！

□未知なる道
□一歩踏み出す勇気
□リアルRPGの冒険
□今日が人生最後の日なら、今日することは自分がしたいことだろうか？

一歩踏み出す勇気

一歩踏み出す勇気
■Writer&Photographer
船橋証考
■Age
28歳
■Profile
銀行を退職後、世界一周を達成。もう一周しようかと思案中。
http://www.facebook.com/masataka.funahashi
http://journeyatw.blog58.fc2.com/

　バックパッカーとして最初に訪問したのは台湾だった。海外旅行経験はあったけど、一人旅は初めての経験。空港での入国手続き、両替、市街地へのバス移動。人と接するたびにうまく意思を伝えられるか、騙されたりぼったくられないかとビクついた。人とコミュニケーションを取ることを恐れた。会話することすらビビっていた。

　ところで台湾は「日本」があらゆるところに浸透している。吉野家やモスバーガー、ファミリーマート等日本ブランドはそこら中に見かけるし、日本人向け飲み屋街もある。台北１０１の受付のお姉さんは日本語が上手い。そして泊まっていたのは日本人が経営する日本人宿。日本語と最低限のボディランゲージでなんとかなってしまった。日本人に優しい環境が、台湾にいるのに気持ちを引きこもらせてしまった。次に訪問したマカオでも同じような気持ちを引きずっていた。

　一歩踏み出すきっかけになったのは３番目の訪問地、香港での出来事だ。インターコンチネンタルホテル前の星光大道（アヴェニューオブスターズ）からビクトリアハーバーを眺めていたら、２人のかわいい女の子から中国語で声をかけられた。何を言っているかわからなかったが、赤の他人にカメラを差し出しながら頼むことと言えば一つだけ。不意のことで思わず
「いいですよ」
　と日本語で答えた。その日本語に２人は反応した。
「日本ノ方デスカ？」
　２人は中国の東莞という街からやってきた女子大生だった。大学の授業の一環で日本語と英語

を学んでいるらしい。日本語が話せると言っても、込み入った会話ができるほどではなく、時には英語や漢字の筆談で意思を伝えあった。そして、２人とも今風でかなりかわいい。中国人にありがちな二昔前のファッションではない。俄然興味が湧いてきた。

話をしているうちに盛り上がり、写真を撮ってあげるはずだったのが、いつの間にか彼女たちの写真に収まっていた。２人ともデパートで化粧品販売のアルバイトをしているらしい。初香港で、友達の家を訪ねるつもりが相手の都合が悪くなりドタキャン。今夜の宿も決まってない。

ブルース・リーの銅像やジャッキーチェン他香港・中国のスターの手形を見物して楽しんだ。ひと通り見て回ったところで彼女たちはご飯を食べに行かないかと提案してきた。お昼時だった。（そら来た）まず警戒心が湧いてきた。めちゃくちゃ高いところに連れてかれるか、変なものを食わされて睡眠強盗か？　そんな考えがよぎった。旅を始める前に旅行好きの友達から教わったことがある。

「観光地で日本語で話しかけてくる奴には気をつけろ。深入りするとロクなことにならない」

と。今まさにそんな状況だった。

だけど、どうせ暇だしその日はSOHOで酒を飲むくらいしか予定はなかったし、なにより２人ともかわいいのだ。正直別れ難かった。大げさだが清水の舞台を飛び降りる覚悟でOKした。ただし彼女たちがどこかの店に一直線に入ろうとするなら逃げ出そう。なにしろ彼女たちは香港に初めて来たと言っているのだから。

どこで食べようかと尋ねたらわからないと答える。初香港だし、友達に連れて行ってもらうつもりだったからか、ガイドブックも持っていなかった。自分も香港に着いたのは前日のことでどこに何があるのかよくわからなかった。近くにある百貨店（日本のSOGO）のフードコートにでも行こうかと尋ねたら「高い」の一言の下に却下された。

「せっかくだし奢るよ？」

と振っても目を丸くして

「とんでもない」

と答える。あれ、俺警戒しすぎたかな……。

街をしばらくうろうろした後、尖沙咀の裏通りにある小汚い食堂に落ち着いた。ガタつくプラスチックのチープな椅子やテーブル、使い古した食器類はいかにも地元民御用達。

「こんなとこでいいのか？」

と尋ねたら

「いつもこういうとこで食べてるから」

と答える。牛肉麺やワンタン麺を美味しそうに啜る彼女たちの姿は素の中国人女性のもの、そ

んな姿を見ていたらようやく心を許せるような気がしてきた。

　その後２人の今晩の宿探しにつきあい、夜はビクトリアハーバーのライトアップショーを見物し、女人街を歩いた。翌日はビクトリア・ピークを登り展望台やマダム・タッソー人形館を見学して楽しんだ。合間に簡単な中国語を教わったりもした。その日の夜行バスで東莞に帰るというのでバスの発着場まで見送った。涙を流して別れを惜しんでくれた。２人は本当にいい子たちだったのだ。

　旅には、警戒心を常に持ちあわせなければならないが、恐れていては何も始まらない。踏み出す勇気が必要だ。言葉の壁なんて意思と勇気ですぐに乗り越えられる。一歩踏み出せれば同じ観光地でも、全然違った景色に見えてくる。踏み出せなかった台湾、マカオの印象はとても薄い。だけど香港での記憶は、彼女たちとの思い出と共にとても鮮明だ。この後様々な国で様々な人々や旅行者に出会い、仲良くなれたのは彼女たちとの出会いがあったからだ。

　彼女たちとは今も連絡を取っており、来年日本にやってくる。再会するのがとても楽しみだ。

未知なる道

■Writer&Photographer
谷川和哉（Kazuya Tanigawa)
■Age
29歳
■Profile
自分の知らない世界に触れたくて、初めてカナダに行ったのが高1。国内外問わずウロウロと。多くの街に行くよりは、一つの街でじっくりと人に触れる旅がしたい。現在は、技術者として腕みがき、翻訳ボランティアをしながら、エネルギー問題の解決方法を考える日々。誰か一緒にやりましょう。100人100旅；第１、３、５弾執筆者。100人100旅を通して東京、名古屋、京都、熊本、函館、イタリアで写真展を開催。個人的にも名古屋の旅人と共に写真展を開催する。
Twitter；ponn_kazuya

　家でテレビを見ていた。山と湖が映っていた。見たことのない風景、見たことのない街並み。よし、カナダに行こう！　高校に入学したばかりの僕は決意した。
　そこから必死でアルバイトをした。親にも、友達にも、学校にも、塾にも内緒で必死になって稼いだ。しかしどうやっても、チケット代は稼げても向こうで滞在することなど出来ない。でも、どうしても行きたかった。最低限、向こうに行ければなんとかなる！　そんなことを思い、勝手に申請を行なった。親へのごまかしなどいくらでも出来る（そう信じていた）。

　夏休みに入った途端、部活には「休みます」の一言、親には「旅行に行ってくる」の置き手紙だけを残してアメリカへと旅立った。アメリカから北上をしてカナダを目指したかった。
　ロサンゼルスに着いた。異国の地。もちろん英語などほとんどしゃべれない。日本にいるときは英語がしゃべれないことが問題になるなど、思ってもみなかった。空港の職員が何を言ってるのかわからない。なんでなんとかなったかも分からない。

　でも、それでもすごく高揚した。見たことのない世界。見たことのない人たち。嗅いだ事のない空気。空港の人が銃を持っている。漫画でしか見たことのない風景。すごく高揚した。地図は、学校で使っていた地図のみ。どうやったら北上できるのか。辞書とスケッチブック。ヒッチハイクを試みた（カリフォルニア州でヒッチハイクは禁止です）。
　初めてヒッチハイクで人を捕まえた。僕は一言、NORTHと書いた紙を持っていた。カナダに行きたい。カナダに行きたい！　と思いながら、CANADA、CANADAと言い続けた。通じたのか、どうなのか一切わからない。それでもその人は乗せてくれそうだった。それだけは分かった。
　意味のわからない所で降ろされた。ロサンゼルスとバンクーバー以外分からない。でも、この

人はここまでしか行かないんだな。と理解して、僕は降りた。そして、またNORTHって書いた紙を持って道路立った。それを繰り返した。

　アメリカは怖い国だと思っていた。１５歳の僕は、向こうからみたら小学生にもみえたんじゃないかと思う。それでも向こうの人は優しかった。言葉が通じない僕にもすごい優しかった。ご飯代をおごってもらうことも多かった。テントで泊まることも多かったけれど、家に泊めてもらうことも多かった。
　危ない目に遭ったりもした。ドラッグをやられそうになったり、テント泊自体も危なかったと思う。強姦にあってもおかしくなかったし、お金を奪われて、殺されてもおかしくない。そんな状況なのは知っていた。
　でも、理解はしていなかったと思う。それまで、僕はそれを、そこをテレビの中の世界だと思っていたから。でも、実際に優しくしてくれる人、脅してくる人、全てが自分の目の前にいる。全てが目の前に現実として存在する。世界は僕の知らない世界で溢れている。これから、僕はこの世界を知っていける。そう考えるとワクワクした。

　最終的に、僕はカナダにたどり着くことが出来た。i-phoneもパソコンもない初めての一人旅。高校１年生の、初めての海外旅行。刺激がいっぱいで、危ないこともいっぱいした。今なら絶対出来ない。そんな旅。
　カメラを買って、持っていく。そんなお金さえなかった。それでも、僕の頭の中にはカナダの湖と山の風景が鮮明に残っている。
　当時、お世話になった、同年代のカナダ人とは、高校を卒業するまでPEN-PALとして連絡を取り続けた。もう15年も前の話。このあと、僕はアジア旅行にがっつりはまり、カナダにはホームステイに一回行っただけだ。

　これを書きながら、15年ぶりにカナダに行きたい。そんな情熱に駆られています。

リアルRPGの冒険

■Writer&Photographer
ワールドハッカー
■Age
31歳
■Profile
元バックパッカー、現在は職業ハッカー。
ブログ『World Hacks!』にて海外旅行関連の情報を毎日発信しています。
http://bit.ly/WorldHacks
Brali Vol.1からVol.7まで7連続記事掲載。

　誰にでも、何事にでも、「初めて」という経験があります。
　本紙の読者層は海外経験の猛者が多いと思いますが、そのような方々に初めての海外旅行の淡い思い出を呼び起こしてもらいたい。また、海外未経験のような海外初心者に、初めての海外旅行のイメージを掴んでもらいたい。このような思いから、「初めての海外旅行」というテーマで書いています。そのため、以下「初めての〇〇」という括りで構成しています。

■初めての海外旅行計画
　大学２年(２０歳)の春休みに２週間ほどぽっかりと予定が空き、なんとなく興味があった海外旅行に行くことにした。キッカケはこんなものでした。
　大学生協の旅行パンフレットにあった、タイ～マレーシア～シンガポールを巡る『マレー半島縦断の旅』を選択した。それは、移動手段と数泊分のホテルが決まっているだけで、あとは完全自由なフリープランであり、縛られず気ままに旅したい海外初心者としては、最適であった。東南アジア×フリースタイルということから、形から入るのが好きな私は、大学の部室にあった所有者不明のバックパックを拝借し、バックパッカースタイルで行くことにした。

■初めての旅行チケット
　空港にある旅行代理店の受付で、旅先で利用するチケット類(航空券、ホテルのバウチャーなど)を受け取る。このとき、かつて「ゲーム馬鹿」と呼ばれるほどゲームをしていた私は、新しく買

ったRPGをプレイするような高揚感を覚えた。このチケット類を使い切って日本に戻ってくることがゲームクリアなのだと、リアルRPGを冒険する設定とすることにした。ただ、この旅行プランで本日出発は私だけらしいことを聞いた。パーティーを組むことはできず、一人で冒険に出発することになった。一人のほうが得られる経験値は多いと前向きに捉え、バックパッカーレベルを上げるための冒険は始まった。

■初めての飛行機と入出国

心配していた日本の出国手続きでは、周りの様子を観察しながら、各ポイントで言われるがまま行動していたら、何の問題もなく出国することができた。なるようにしかならないものらしい。

そして、飛行機(タイ航空の深夜便)へ搭乗。これが生まれて初めての飛行機だったので、終始ドキドキしていた。隣座席に乗り合わせた旅慣れたおじさんに旅先の情報や旅のノウハウについて色々と教えて頂いた。そして、バンコク到着後も周囲の真似やおじさんにいろいろと教えてもらいながら荷物受け取り、無事入国手続きを完了させることができた。

[LvUp]周囲を観察＆真似する。分からないことは有識者に教えてもらう。

■初めてのタイ人

出国ゲートから出て、目の前にしたタイ人の多さと迫力に驚き、恐怖さえ感じた。ゲートから出る人々に何かわからんが必死に声を掛けている。呆気にとられた。ここからどうすればいいのだろう……と思っていると、(明らかに日本人によるものではない)カタカナで私の名前が書かれた紙を持った、40歳ぐらいのタイ人男性がいるのに気づいた。

恐る恐る自分の名前を伝えると、そのタイ人は「ついて来い」とジェスチャーし、さらに「車に乗れ」とジェスチャーした。言われるがまま、やる(しかない)。車の中で英語で話しかけるも、通じていないのか「オーケー」と言ってにやけるだけ。

初めての外国到着の１時間後に、英語も話せない素性の分からないタイ人のおっさんと深夜に車で二人きり。この人は本当に担当者なのか？　人里離れたところに連れて行かれて身ぐるみを剥がされるのではないか？　などなど悪い方向に想像してしまう。この恐怖感は筆舌し難い。

恐怖に震えていると、３０分ぐらい経過した頃に車が停まる。ホテルに到着した模様。どうやら大丈夫そう。ひと安心した。チップを渡しておっさんとはさよならした(疑ってごめんなさい)。

ホテルの部屋に入ると、緊張感からの解放と無事に到着できたという安堵感から、肩の荷が下り、自由になれた気がした。
　[LvUp]日本のツアー会社を通した現地のガイドは、(ほぼ)信頼しても大丈夫。

■初めてのトゥクトゥクと宝石商
　翌日ホテルから出ると、客待ちしていたトゥクトゥク(タイの三輪バイク)のドライバーが声をかけてきた。
「どこに行くんだ？」
「〇〇寺院に行きたい」
「１０バーツ(約３０円)で行ってやろう」
「(さすが物価が安いな) じゃあお願い」
「そういえば、今日はブッダの日なので、寺院は休みなんだよー。別のいいところ連れて行ってやろう」
「(あーそうなのか) じゃあそこでいいや」
　と、連れて行かれた場所は、宝石商。中に入って宝石を見て回る(当然買うつもりはない)。店の人に話しかけられ、適当に返事していると、奥の小部屋に招かれた。その個室で、宝石の説明を受ける。店員から言葉巧みにプレッシャーを掛けられ、買わざるを得ない空気になりつつあったので、トイレに行くふりして店から脱出した。
　[LvUp]ヤバイと思ったら逃げる。曖昧な返事をせずに、必要ないものはハッキリと「No」と断る。商売人の言うことは疑え(後に知ったが、単に宝石商へ連れていきたいがためにブッダの日というウソをついた。トゥクトゥクドライバーは店に客を連れて行くと、ガソリン割引券などをもらえるらしい。１０バーツという破格なのはこのため)。

■初めてのぼったくり
　チャオプラヤ川クルーズに参加しようと行ったときのこと。船が出発する直前に到着し、係員に
「早くして！　料金は８００バーツ(約２４００円)！」と言われ、焦ってその言い値を支払ってしまう。実際の価格は１/１０以下だと思われる……。やられた。
　[LvUp] 現地の貨幣価値・金銭感覚を身につける。言われる料金は基本ぼったくりと疑う。

■初めての価格交渉

　やられっぱなしでは駄目だと思い、気合いを入れて、トゥクトゥクと料金交渉したときのこと。交渉に時間を掛けて粘って１００バーツを２０バーツまで強引に値下げすることが出来た。やった！　と浮かれていたが、到着した５分後に全く違う場所に連れて来られた事に気づく。やられた。

　[LvUP]ただ安くしたいだけの強引な値引きは禁物。自分なりの目標金額を決め交渉する。相手とのWin-Winの関係を持つことが大事。

■初めての屋台での食事

　バックパッカーらしく、と初めて屋台で食事したときのこと。見よう見まねで注文し、出てきた料理をおいしくいただくことができた。なんとかなるもんだなぁと思って、店の人に値段を聞くと高額料金(適正料金の５倍ぐらい)を請求された。抗議したが全く受け入れてもらえず、渋々その値段で支払わされることとなった。やられた。

　[LvUP]値段は事前交渉する(特に食事は元の状態に戻せない)。ぼったくられたお金は授業料だと思って諦めること。

■おわりに

　記載した内容は、最初の２、３日の出来事であり、以降、初めての海外旅行では、「初めての海外バス」「初めての宿探し」「初めてのゲストハウス」「初めてのムエタイ観戦」「初めての遺跡巡り」「初めての海外鉄道」「初めてのシュノーケリング」「初めての陸路での国境越え」「初めての外国人と口喧嘩」……のような「初めて」体験で経験値を得て、レベルを上げ続けました。それらについては別の機会で紹介させていただければと思います。

　さて、「初めての〇〇」というテーマで書きました。

　完全に自己責任の環境で刺激的で濃厚な日々を過ごす。その中で、一期一会の重みや旅の素晴らしさを感じることができ、人間として、少し成長した気がします。「初めて」を積み重ねて、人は大きくなっていくという言葉が身に染みました。帰国した私はすぐに次の冒険に向けて、自

分用のバックパックを買いに行きました。
[LvUP]自分のレベルに合わせて、装備品も良いものにする。

こうしてリアルRPGは２回目の冒険に続くのでした。

今日が人生最後の日なら、今日することは自分がしたいことだろうか？

今日が人生最後の日なら、今日することは自分がしたいことだろうか？

■Writer&Photographer
岡部能直
■Age
34歳
■Profile
世界の絶景や世界遺産を中心に約2年間で世界一周。南極大陸を含む七大陸、60カ国以上、150世界遺産以上訪問した経験を活かし、世界各国の旅コラムを執筆中。

“今日が人生最後の日なら、今日することは自分がしたいことだろうか？”

これはスティーブ・ジョブズ氏が毎日鏡に向かって問いかけていたという有名な言葉だ。毎日が人生最後の日だとするなら、最後の晩餐に寿司を食べると決めている僕は寿司を毎日食べ続けることになってしまうのだが……。
ジョブズ氏のように、今日明日の超短期的なことを考えて日々の行動を決定するかどうかは別として、遅かれ早かれ人生最後の日は誰にでも訪れるのだから、人生の中でしたいことが何かを考えておくのは必要なことだろう。

そして最も重要なことは、それを『実行する』ことだ。
自分もやってみたい、行ってみたい、欲しい……、漠然とした欲求を持つだけなら誰でもできる。仕事のこと、遊びのこと、恋愛のことなど、短いながらも自分の人生を振り返ると、やらなかったことで後悔していることはある。誰しもそんな経験があるのではないだろうか。いつもいつも欲求だけ、羨ましがるだけで、なんだかんだと御託を並べてやらなかったり行動しなかったり。リスクは負わないかわりに得るものも何もない。

僕にとっての『世界一周』もまた、普段の自分なら指を咥えて羨ましがっているだけの欲求の一つとして、どこかに埋もれてしまっていても不思議じゃなかった……。

２００９年の大晦日、僕は前日に行われた忘年会のお酒を頭に少し残しながら、不安とそれよりも大きな期待を胸に、二度目のバックパッカー旅に出ていた。しかも今回は世界一周という壮大な計画だ。

それまで、会社の夏休みやGWを利用してハワイ、フィジー、モルディブなど、スーツケースにアロハシャツと水着を詰め込んで、ビーチで昼間からビールを飲みながらのんびり読書するようなビーチリゾーターだった自分が、まさかバックパックを背負い、汚い屋台でご飯を食べ、流し台で衣類を洗濯するようなバックパッカーをするなんて、人生ってどこで何が起こるかわからない。

最初の訪問国である中国の上海で２０１０年を迎えた僕は、深夜営業の屋台で魯肉飯のようなものをかき込みながら、世界一周をすることになるキッカケを思い出していた。

そもそも僕が世界一周を決意するに至ったのは、世界一周に出る１０ヶ月前、２００９年２月に行ったエジプト旅行でだ。大学卒業後、社会人９年目を迎えようとしていた僕は、勤続２年毎に２週間の休みをもらえる会社の制度を利用して、仕事を忘れどこか海外で羽を伸ばしに旅行するつもりだった。ただ残念ながら今回、僕には一緒に行く相手がいなく、やむを得ず一人旅をすることとなった。それが初めての一人旅デビュー戦だった。

「一人旅でビーチリゾートは寂しすぎるだろうな」

結局この１年後に一人で寂しくタイのビーチで日焼けをしたり、２年後にまた一人寂しくブラジルのビーチで火傷並みの日焼けをすることになるのだが、初めての一人旅はガツガツと観光できる観光地にしようと思い、バックパッカーデビューにエジプトを選んだのだった。

初めてのバックパッカー旅は正直イライラの連続だった。

いま思えば、それは世界三大『人がウザイ国』として、インド、モロッコと並ぶエジプトならではの洗礼だったのかもしれないが、イスラム教の喜捨（富んでいる者が貧しい者に与える）の精神を盾に、毎日毎日旅行者に対して「バクシーシ、バクシーシ」とお金をせびるエジプト人の嵐にうんざりし、ピラミッド前で写真を撮ってやると言っていたエジプト人がそのままカメラを返してくれなかったり、２４０エジプシャンポンド（=当時約３,６００円）で１日チャーターしたはずのタクシーが降りる間際に２４０ドル（=当時約２１,６００円）とお金の単位を変えてきたり、タクシーの運転手の言う「thirty（３０）」が自分には「セルティー」にしか聞こえなくてタクシー代で揉めたり……、平気で人を騙して利を得ようとするエジプト人とマジ喧嘩した。親切で言ってくれているのか、ただ喜捨を求めているのかわからなくなり、もう、エジプト人の全員が敵に見えてくるし、免疫のなかった僕は、おそらく一生エジプト人とは友達になれないと思った。

まぁそんな最悪スタートのエジプトライフだったが、何とかバックパッカー初心者の自分もだんだんとコツを掴み始め、首都カイロから二都市目のルクソールに移動した。ルクソールはカルナック神殿をはじめ、エジプトのかつてのファラオ（王様）のお墓が集まる王家の墓などがある観光都市だ。

到着初日、町歩きを終えて、宿泊している安宿の屋上レストランで何か食べようと屋上に上がってみると、なにやらアジア系の男性ゲストがボールジャグリングの練習をしていた。長い髪をヘアバンドでまとめ、カラフルでユルユルのシャツとパンツを履いている彼は、テッペイ君という日本人の旅人だった。僕の身近の友人には、バックパッカーはおろかワーキングホリデー経験者すらいなかったので、世界を長期間も旅する人に出会ったのはこの時が初めてだった。彼の年齢は僕の一つ下で３０歳。

そして驚愕したのは、この時点で２年半ものあいだ海外を放浪しているだけではなく、更にその前にも２年半の放浪を２度も経験しているというのだ。２年半放浪しては、日本に帰ってお金を貯めてまた旅に出る。それを繰り返して通算７年半も海外で生活しているらしい。

その話を聞いて、自分の中でパラダイム転換が起こった。

大学を卒業し、就職して定年を迎えるまで働き、その間に結婚をして、子供ができて育児をし、定年後に自分の時間を持つ、という生き方に何の迷いも持っていなかったし、「そんな生き方もあるんだなぁ」って、正直そう思った。

それと同時に、自分も世界中の絶景を見てみたい、現地の美味しい料理を食べてみたい、旅行番組や旅雑誌を見るだけで行った気になってるだけなんてもったいない、と沸々と『世界一周をしたい』願望が沸いてきていた。

もしすぐに１～２年の旅に出たとしよう。短いながらも過去の自分の人生を振り返ってみて、２年という年月はたかが知れている。働き盛りの３０代前半の２年は、長いと言えば長いのかもしれないが、自分が人生を終えるときに振り返るその２年は、いま考えるより短いだろう。そ

れに、年齢的にもこれから結婚して子供ができて順調にいった場合、どんどん旅立つハードルが高くなるので、今のうちにチャレンジしたほうが良いだろう。２年なら取り返せる。やりたいことをやらずに我慢して後悔するより、やってみて後悔する方がいい。
　色々なことを考えた。なるべく自分の背中を押せることを。

　帰国後、全く悩まなかったといえばウソになるが、ちょっと悩んで……、しばらく悩んで……、いや、相当悩んでから、世界一周の旅に出るという意思を上司に伝えた。そして同年秋に会社を退職し、大晦日に成田を出発。僕は上海で新年を迎えてから屋台で魯肉飯のようなものをかき込んでいるのだ。

　今回、僕は本気で世界一周を実現させようと思った。いやむしろ、欲求だけで行動を起こさなかった自分を変えたかっただけなのかもしれない。やるのもやらないのも、きっと紙一重。少なくとも世界一周に行くか行かないかなんて、そんな程度のことだ。でも、その持ち上げた足をその場に下ろすのと、前に踏み出すのとでは全く違う。
　自分ももしあの時に躊躇していたら、世界を旅する旅人達のブログをただただ羨ましがりながら、悶々とする気持ちを抑えつつ働いていたのかもしれない。でも、ちゃんと一歩前に踏み出したからこそ、世界の絶景を自分の目で見ることができたし、本場の料理を堪能してきたし、現地の人と触れ合うことができた。今は充実感で満ちている。

「世界一周すごいなぁ。自分もやりたいなぁ」
　僕にこの言葉を言った人も少なくない。
　僕くらいの年齢になると、結婚していたり子供がいたりする友人も多く、家庭環境がネックになっている場合もある。Brali読者の中にも家庭を持っている人も多いかもしれない。が、僕に言わせれば夫婦で世界一周している人達も多く、結婚指輪以上に夫婦を一つにつなぐであろう世界一周体験をするのがすごく羨ましかったので、いますぐにでも行くべきだ。
　さすがに小さな子供を連れたバックパッカーには会わなかったが、妊娠中の奥さんを一生懸命説得し、日本に残したまま海外一人旅をしている男はいた。甲斐性が無さ過ぎて爆笑してしまったが、そこまでして夢を実現させている輩もいるのだ。子供の一人くらいバックパックに詰めて旅するのもワイルドってものだ。
　そういえばラオスで、大学卒業間近に一人で山奥の秘境を目指している１０歳も年下の大学生に会った。彼は帰国後、公務員として働いていたのだが、青年海外協力隊に参加したいという夢を持ち、親や上司にその旨を伝えることで自らの退路を断って、夢に向かって進みだした。その行動力には感心する。

　旅は人生に似ているとか、旅は人生の縮図だとか言われている。

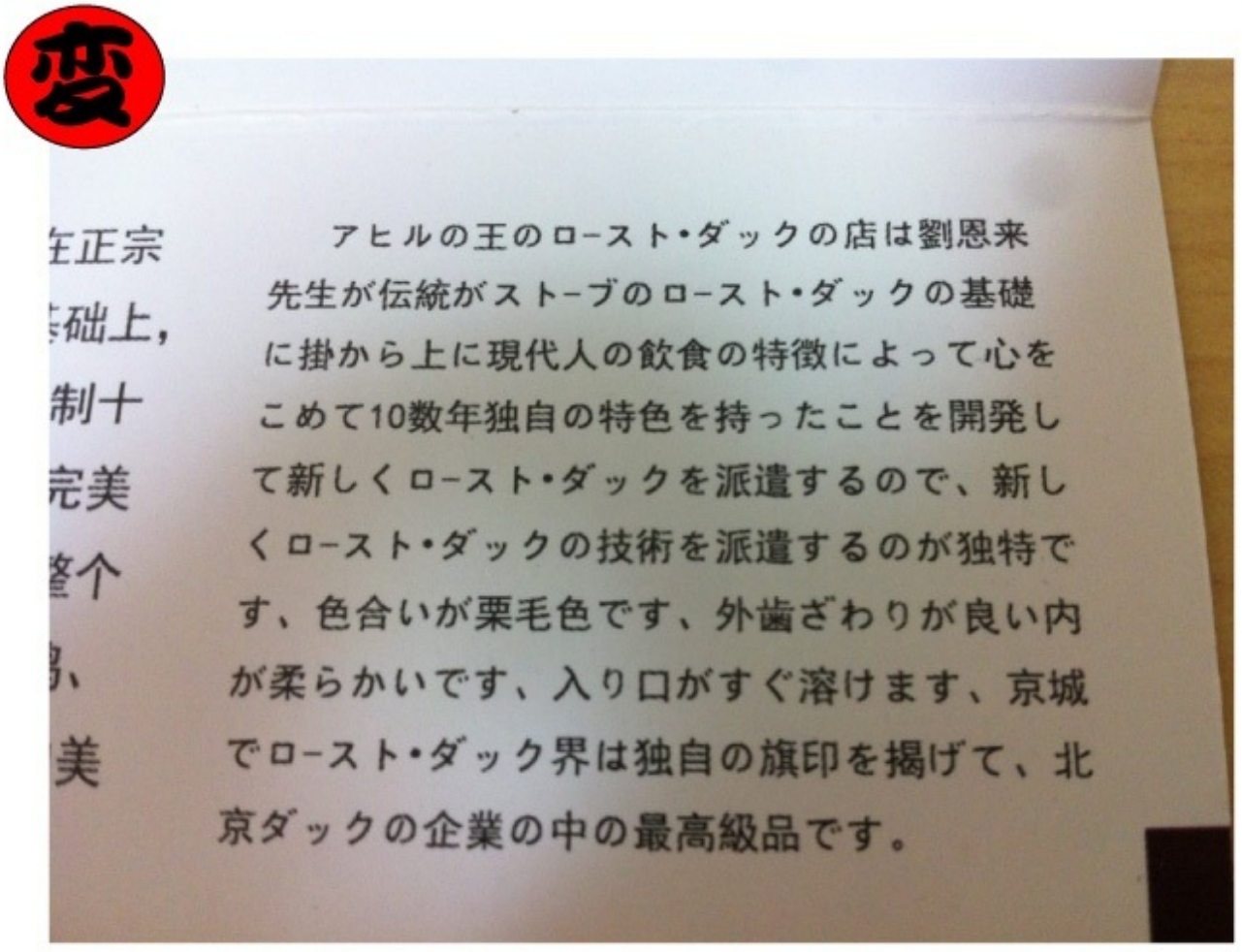
　旅の内容を自分の意思によってどのようにも変化させることができるように、人生も自分の意識次第でどんな形にも変えることができる。そう、いつからでも挑戦は始められるのだ。

　Braliの読者には、旅に興味があったり、旅が好きな人が多いと思う。
　もし世界一周やバックパッカー旅に憧れているのなら、このBraliと触れ合えたのをキッカケに、旅を実現させてみてはいかがだろうか。

～十人十旅～

旅先の変な日本語

海外の旅先で見かける、どう見ても変な日本語。看板やメニュー、商品やチラシに至るまで。笑わせてくれる「変な日本語」をTwitterで集めて見ました。



もう何を伝えたいのか全くわかりませんね。典型的な自動翻訳でしょう。日本でも公的機関で自動翻訳を使ってひんしゅくを浴びてましたね。
http://twitter.com/hideto328

「いざーかや」「カツーどん」とプロレスの選手入場時の派手なアナウンスを彷彿とさせます。
http://twitter.com/yoksal_mumrik

どこも「変な日本語」ではありません。何も間違ってません。ただ、何かおかしいんですが・・・。
沢井ブルースさん

私がフィリピン英語留学をする理由　～世界一周で感じた後悔を次に生かす～

私がフィリピン英語留学をする理由　～世界一周で感じた後悔を次に生かす～

■Writer&Photographer
大谷　浩則
■Age
29歳
■Profile
猪突猛進のトイレットパッカー。現在世界2周目！
フィリピン留学からスタート。
旅のPodcast配信しています！
Podcast:ウィーリーのバックパッカーラジオ　世界一周アワー
http://tabitabi-podcast.com/sekai1/
Blog:ウィーリー　海外放浪×地球一周×フィリピン留学　～実況！旅人アワー～
http://ameblo.jp/hero23/
Twitter:@taniwheelie

皆さんこんにちは！　フィリピン留学連載２回目になります。
２０１２年４月１５日からフィリピン留学をしています。そのなかで感じたことをお伝えしようと思います。今回は勉強の成果についてお話しします。

多くの方は「成功ストーリー」に耳を傾けたいと思いますが、「成功していない？ストーリー」もたまにはいいでしょう。

留学して２か月弱になります。学校の雰囲気にも慣れて生活のリズムとしては最高です。朝６

時過ぎに起きて７時からの授業に出る。そして１８時半までの授業を終え、２４時の就寝まで自由時間を過ごすという生活です。

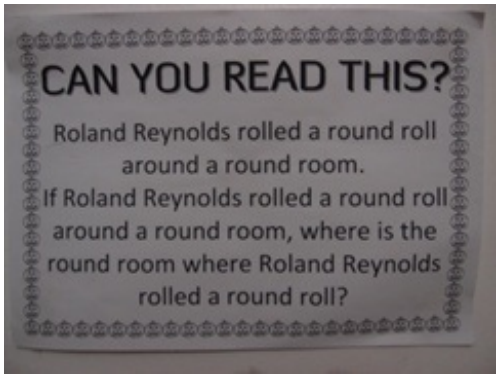
　肝心の英語力についてですが、一向に伸びていません。よく「英語に対して耳だけはすぐ慣れるよ」というコメントを聞きますが、私にとってそれは適応外でした。ぜんぜん聞き取れません。どのくらいの聞き取りレベルかといいますと、先生が私のためにゆっくり話してくれる時は聞き取れます。しかし、いったん雑談ベースになると何を言っているのか全く分かりません。苦し紛れに「笑顔でかわす」という最悪のリアクションをしているのが現実です。

　先生に何が問題か？　と尋ねると「君は文法的には問題ないけど発音が悪すぎる。発音ができていないから聞き取れないのだよ」という回答をいただきます。全ての先生が同じことをおっしゃるので事実でしょう。典型的な日本人です。

　唯一英語能力で伸びたと思うのは「多少発音が良くなったこと」でしょうか。「R」と「L」、「F」と「V」、「TH」、「P」と「B」の発音は多少良くなりましたし、どうやって発音したらよいのか分かった気がします。

　マンツーマン授業の１コマを発音の授業に変えて練習しています。先生から発音の動画をいただいて勉強しています。そして、鏡の前で自分の口の動きを見ながらトレーニングです。地道な作業ですが、「発音」がこんなにも重要とは知りませんでした。

※街中で私が英語で話しかけても相手は全く反応してくれませんでした。というのも「私の発音」が悪すぎて理解ができないようです。そして、先生方も私のフリートークはほぼ何を言っているのか分からないようです（笑）。　日本のカタカナ英語教育の弊害ですね（苦笑）。



　読者の皆様が一番関心あるのは「フィリピン英語留学で果して本当に自分の英語が伸びるのか」というところだと思います。

　私は恥ずかしながらほとんど伸びていません。そして、ほとんど英語能力が伸びずに帰国する人も多々見ています。でも彼らは自分の留学が失敗とは言いたくないので「耳だけは慣れたよ」

というのです。

　フィリピン留学のメリットは英語に触れる機会が確実に増えることです。毎日６～９コマの授業は英語ですし、同室の方と話すのも英語です。あとは自分でいかにこの英語環境を能力向上に生かすか、に限ると思います。
　土日祝日は英語を使う機会が減ります。そこでカウチサーフィンなどのサービスを使って現地人と友達になったり、バー等でフィリピン人の友人を作るのも良いのではないでしょうか。一度現地で友達ができればほぼ毎週彼らと遊べます。

　よく聞かれる以下の心配はほぼ無用だと思います。
①マンツーマンの先生と相性が合わなかったらどうしよう。
②フィリピン人の英語は訛があってクセになりそう。

→①相性が合わなかったら毎週先生を変えることができます。そのため心配はいりません。※ただ、毎日変更した先生と顔を合わすので気まずいでしょう。そこらへんは韓国人の方達は気にしないようで平気でどんどん変更しています。
→②確かに訛は多少ありますが、訛を気にしている場合じゃないと思います。訛を気にするレベルになったらとっくに英会話できているのではないでしょうか。留学先の先生は一定の基準を経て採用されています。訛のひどすぎる先生はほぼいないと思います。※基本はアメリカ英語ですが、多少タガログ訛が入っているのが現状です。

　こんな感じのフィリピン英語留学です。来月には卒業です。あと１か月でどのくらい進歩できるのか楽しみです。「英会話ができるようになって外国の友人をたくさん作る」というのが世界２周目の目標の１つです。どこまで実現できるか楽しみながら留学を続けます。

株式会社たびえもん
http://tabiiku.org/tabiemon.html

プロフィール
木舟　周作（きふね　しゅうさく）
株式会社たびえもん代表取締役。
総合旅行業務取扱管理者。旅育コンサルタント。自転車世界一周達成。
五大陸およそ７０ヶ国を訪問の経験と、旅行業のプロの知識を活かし、子連れ旅行＆旅育を推進中。

木舟　雅代（きふね　まさよ）
株式会社たびえもん取締役。
グラフィックデザイナー⇒アジア放浪⇒テキスタイルデザイナーを勤めたあと、
「インドと同じ味のチャイを出してくれるお店ってないな……」
ふとしたつぶやきがきっかけで、カフェ出店となりました。

開店してまだ一ヶ月半の旅行会社と旅カフェの経営者ご夫婦にインタビューしてきました。

---今までどんな旅をされてきましたか？

周作さん：一番長いのは、自転車世界一周、約２年半です。学生時代にサイクリング部に入ったのが旅行好きになったきっかけで、最初のうちは国内旅行でした。先輩と同期と５人で台湾へ行ったのが初海外。カナダ、マレー半島など１人で出かけるようになりました。社会人になってからは休みが限られ、東南アジアなど近場、自転車なしの旅行がほとんどで、１回だけ１０日あまりの休みをもらって、ポルトガル～スペイン～モロッコを自転車で走りました。その時、ああ、

もっと長い旅がしたいなあと思ってしまい、道を踏み外して、会社を辞め、世界一周の旅に出ました。結婚後、子供が生まれてからも、時々旅行に出かけています。
雅代さん：一番長いのは、一人旅で１年。タイが最初でミャンマー行ってバングラちょっと行ってインド。その後ネパールに行ってまたインドに戻ってパキスタン、アフガニスタン。またパキスタンに戻って。ここら辺は陸路で。イランへ行ってトルコに抜けてブルガリアに行って、またトルコに戻ってきて南下。中東の方に。シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルと行ったり来たりで順番の記憶は定かじゃないんですけど。で最後はエジプトか。ま、そんなハードじゃないでしょ。同じユーラシアでも中国から中央アジア抜けて行くとまた大変だったりすると思うんですけど。

---起業しようといつから考えられましたか？

周作さん：漠然とは、以前からですが、わりと具体的になったのは昨年の２月頃、１年少し前からでしょうか。

---事業は大きく２つに分けて旅行企画とカフェでしょうか？

周作さん：旅行会社とカフェで旅行は企画だけでなく予約と手配もしています。オーダーメイドの海外旅行がメイン、カフェでご来店されたお客様から国内旅行の問い合わせをいただくこともあります。

---旅行の企画や予約手配はどんな感じですか？

周作さん：もともと前の会社の時にオーダーメイドの海外旅行をメインでやってましたんで、それが得意というか。カフェみたいな所でお話しながらプランを組み立てて行くというスタイルですね。自分がやりたいのはパックじゃなくて自由に行きたいところに行って鉄道乗り継いでとかの旅行をしてたので、そういう旅行を、お客さんのご希望に合わせてプランニングして、あとホテルとか必要あればガイドとか送迎とかお付けして。

---旅行業の方はどこで利益をとるんですか？

周作さん：受注型企画旅行っていうんですけど、パッケージツアーって、飛行機代はいくらで観

光代はいくらですとか、内訳ないじゃないですか。受注型企画旅行も同じなんですよ。基本的には総額のご案内ですので。逆に言いますとホテルだけ単体っていうのは基本的にはないんですよね。航空券だけっていうのもできるんですけど、いまどこの航空券も発券手数料をもらう形に旅行業界自体はなってますけど。
実際現地の手配会社に見積り、例えばこういう日程でここは送迎付けて依頼するじゃないですか、現地からそれらを含めていくらって感じで返ってきますので。送迎だけ切り離していくらっていうのは難しい。現地も送迎だけだったらやらないよって。その辺はある程度お客さんにご理解をいただきながら。

---カフェって決めたのは何故？他の選択肢はありました？

雅代さん：最初はカフェとは全然考えてなくって、主人がとにかく旅行会社として独立したいっていう思いがあり、この練馬近辺で最初は普通の貸事務所を探していたんですよ。
ある喫茶店があって不動産屋さんに紹介されたんですね。子連れの若い家族に来て欲しい旅行会社を作りたいっていうのが主人の目的だったので、不動産屋さんが「例えばですよ。喫茶店を借りてちょっと事務所的にしつらえて、ついでに若いご家族の方に美味しいコーヒーを出した方が旅行の相談とかもしやすいんじゃないですか」みたいなことを言ったんですね。そん時に私と主人がピンと来て、「あ、それイイね」って。そのアイディアにあっさり食いついて。
私も小さい子供がおりまして、なかなか喫茶店って子供が喧しすぎて行けないって話をしたんですよね。そういうお父さんお母さんの日常のガスを抜きつつ、もっと本格的なガス抜きの旅行の相談もできるっていう。その流れいんじゃないいんじゃないって、ついのっちゃって。
ちょっと日本のチャイはガッカリだよねって言って。そういうの（本場のチャイ）出したらなんて。また自分がやるとは夢にも思ってなくて。ホントにノリで「あったらイイのにな、あったら私行くよ」みたいな完全な消費者目線で行く感じですよね。
最初は旅行会社をやろうと思って、そっから喫茶店を合体させたらいいぞってアイディアが出てきて。そっから膨らんできたんでブレなかったですね。飲食店大変だから物販やろうよとか雑貨やろうよっていう話にはならなかったですね。

---旅行して出会った印象に残るスイーツって何ですか？

雅代さん：なんでこんなに美味しいのに日本ではないんだろうって本気で思ったのは中東だったんです。アラブ菓子の専門店。日本の和菓子屋さんみたいな、それでいてカフェテリアも併設し

てて、家族連れが美味しい甘いものを食べてて、メニューも種類がいっぱいあって。こんなに地元の人に食べられてるお菓子なのに、日本にこんなのないよなって。あったらいいのにと思って。ただ日本でお菓子って言うとまずは日本の和菓子。洋菓子って言うとざっくりフランスのお菓子かイタリアのお菓子かアメリカのお菓子か、要するに欧米のお菓子しか紹介されてなくて。洋菓子ほどみんなに愛されてない。そんなに根付いてない。洋菓子なんか例えばフランスへ日本人がわざわざ修行に行くとか、それぐらい貪欲に取り入れようとしてるし。外国のお菓子っていう括りにするともっとこんなに美味しいものとか、日本人が見たことないようなスパイスの入るお菓子とか凄い面白いし、それはそれで深い。世界が深い。なんかこういうのがもうちょっと食べられるお店があってもいいよねってちょっと思った。すっごい最初の小さな小さな動機。まさか自分が店をやるなんてその時は夢にも思ってないですけど。

---お菓子作りは昔からされてるそうですが、変わり種のメニューは研究されたんですか？

雅代さん：現地で修行はしてないです。ただの旅行者なので。元々は育児でずっと外に出られない私がストレスが溜まって、昔気ままに旅してた頃をたまに懐かしんで、儚い気持ちになる時があるんで、色々外国で食べたのをレシピ調べて、ネットとかで。とりあえず思い出しながら作るっていうのが元々。完全に自分のストレス解消のため。
例えばアフガニスタンのお菓子とか。ものすごくカロリーが高いんですよ、レシピ通りに作ったら。でも気持ちが分かるんですよ。気候が厳しいので「これくらいカロリーが高くないと身体が持たないんだろうな」とか。自分が行ったからこそわかるその味というか。なぜそういう作り方になったかとか。なぜこの原材料なのか。その辺がいちいち腑に落ちて、面白いから。いちいちその因果関係というか、よくわかるようになって。
ただそのレシピ通りに作ると恐ろしく甘かったりするんで。砂糖を半分くらいに減らしたりして。
同じようにバックパッカーして、さんざん甘いものを一緒に食べた女の子とかに日本に帰って来てから、「外国で食べたアレは美味しかった、日本でも食べれたらいいのにっていうお菓子ない？」って聞くと基本まずいよねって。そん時は他に食べるものないから買って食べるけど、基本甘すぎるしね。日本が一番だよって言われてガクッときて。だったら日本のレベルの高い味覚の人達にも美味しいって言ってくれるようにアレンジして出せばいいんじゃないって。

---立ち上げの苦労は？

雅代さん：私は去年の１２月に３人目の子供を産みまして、１１月くらいに実家の京都に帰ったんです。で、産んで少し安静にするっていうんでしばらく休ませてもらって１月下旬くらいに東京に戻ってきて、このお店をきれいにして内装とかちょっと手入れて厨房機器とかも買い付けて、あと食器とか。要はお店の体裁を整えるのは私が戻ってきてからなので、かなりのスピードというかタイトだったんですね。単純に産後だったので身体がボロボロで、それと３ヶ月の赤ちゃ

んて２４時間の区別がないんですね。夜中でも泣いておっぱいを欲しがったりするんで。その中での開店準備なんで体力的に非常にハードだった。これからお店をやろうと思ってる女の人にも絶対勧めません。

---お仕事のやりがいって何ですか？

雅代さん：今は子育て中なんで旅行とかできないんですけど、ここにいると色んな方がいらっしゃってこっちが旅させてもらってますよ。面白くて出会いがあって。色んなネタ持った人が来るんで。毎日がそんな連続で面白すぎて。旅行は自分が動くけど、今度は網張って待ってるみたいな。
イラストを書く仕事をやってたので、お客さん達とのやりとりも電話やメールだけで、ものすごい孤立してる仕事をしてたんですよ。地震があったじゃないですか。その時も家で一人で絵を書いてて。そん時に普段から人と繋がってる働き方とか生き方とか、もっと人と繋がってたいなって思ったし、人と人とを繋ぐ中間役っていうか媒体みたいにもなりたい。２４時間の使い方をもっと考えなきゃいけないって思った。
旅の話から始まって、最初はみんなそうなんですけど２回３回おいでになると、自分の持ってる思想的なこととか、深い話になっていくし。そういったとこまで大人の会話ができるのは、私にとっては精神衛生上ありがたい。

---なぜ旅育を事業テーマにしようと思ったのですか？

周作さん：旅が元々好きで、大学のサイクリング部なんですけどね、何周年かの行事の時に後輩の１０歳くらい下の子達と話をした時に全然海外に行ってないっていう話を聞いて、僕なんかが最初に旅行し始めたきっかけは学生の時に先輩と一緒に行って、それで面白くって海外行きはじめて。けっこうその頃って格安航空券がバーっとブームになった時で割りとみんな行ってた。それがいつの間にかみんな行かなくなっちゃってるのかな、っていうところがあって、色々調べてみると若い人の旅行離れっていうのがひとつと。海外だと子供がバーっと寄ってきたりとか、「写真撮って撮って」とかとても賑やかじゃないですか。日本に帰ってきて自転車で走ってきたんですけど、子供を見かけることが少ないですよね。そして自分の子供が生まれたりして。僕が子供の頃に泥遊びするだとか外で遊ぶとか、そういう外遊びが減ってるっていうのと、若い人が旅行に行かなくなってるっていうのがどっかリンクしてるんじゃないかなっていうようなところ。で、可愛い子には旅をっていう言葉って本当にちっちゃい子供にも通じるし、大学生くらいの年

齢になってもやっぱり外に行って色々学ぶことがある。自分の経験からしてもあったわけで。その辺を考えた時に、この言葉は面白いなって。
公園の土が少しくらい汚くても、泥まみれで遊んだ方がいいんじゃないか。それを広げた感じで、公園に行くのがちょっと日帰りの旅行、それが一泊になって。繋がってると思うんですよね。

---練馬区教育委員会で親子向けに旅育の講演を５回ほどされているとのこと。とても素晴らしい活動ですが今後はどうでしょう？

周作さん：なかなか準備が大変なのと、それがそのままビジネスとか事業になるかっていうとならない。ボランティアみたいな。ここもこういうスペースがあると人が集まってくるので、そのうちもう少し慣れてきたらイベント的に講座的に銘打つかどうかはわからないですけど、例えば夜に旅好きの若者向けにイベントをやったりとか、親子連れを集めて小さい子でも旅行に行けるんだよ、行ったらこういう楽しいとこがあるよとか、そういう話をする機会があっても面白いかな。
このお店やったことで、地域の活動やってる方って色々いらっしゃるんですよね。そういう方でご来店して実はこういうことやってるんですよ、みたいな話をいただいたりしているので、例えばそういう人とコラボレーションとかできるのかもしれない。
２０人ぐらいはざっと入るのでそういうイベントだったりとか交流会とか使えていけると面白いのかなと。

---まだ開店から一ヶ月半ですが、見えている課題はありますか？

周作さん：お客様が来ないと成り立たないわけじゃないですか。今一ヶ月半たってやっと一度来たお客様がまた来てくださるようになったかなっていうくらいで、まだ絶対数が少ないので。お客様にリピートしていただく、新しいお客様にも興味をもっていただく。そのための仕掛けをどうしていくのかというところ。どんな商売でも同じだと思うんですけど、何が成功かってわからない。終わってみるとこれが良かったんだなとか見えてくる。試行錯誤少しづつ変えながら。

---今後カフェと旅行業の展開は？また読者の方に一言どうぞ。

周作さん：両方伸ばして行きたいんですよね。カフェにご来店いただいて普通にお茶飲みに来る方。ここが旅行会社だってところに注目されて旅行の話をしに来られたりとか、相談を受けたりとか少しづつ出てきましたので、そこがうまく繋がるとビジネスとしてもいい感じですよね。
人が集まるスペースっていいなって。普通の旅行会社のオフィスってそういうのないじゃないですか。説明会とかをやったりはしてるんでしょうけど。またちょっと雰囲気が違いますしね。
旅の話をしに遊びに来てください。

【くりはらのなんとなくひとこと】
実は前回のBrali Bizの佐谷恭さんからご紹介をいただいたんですが、まずホームページを見てとてもわかり易く丁寧に説明されていて実によくできたサイトだなと感心し、さらにご本人達にお会いして、とても真面目な雰囲気が伝わってきました。でも固っ苦しいんじゃなくって、そこはバックパッカーなので遊びのツボを心得てらっしゃる感じです。
株式会社たびえもんは、「旅育」を堂々創業理念に掲げています。まだお店を開業されたばかりですが、カフェと旅行会社をミックスしてそこに親子連れが旅の話をしたり相談に来たりする旅育の場が既に出来上がっています。親子連れのみならず、学生さんなんかも遊びに行って来店されてる子供達に旅の面白さを伝えていけるようなコミュニティになったら素晴らしいと思います。
まずは一度サイトをご覧ください。
http://tabiiku.org/tabiemon.html

旅で使えるスマホアプリ

旅で使えるスマホアプリ

文字通り旅で使えるスマートフォンのアプリの紹介です。昨今ではスマートフォンやタブレットがバックパッカーの間でも普及し、旅の途中も離せない人が増加中。旅を助けてくれる、旅をもっと面白くしてくれるアプリを紹介していきます。

TRIP KINGは自分の旅行体験を世界中のユーザーとシェアするiPhoneアプリです。
自分の旅の思い出を写真やコメントで記録することはもちろん、友だちと楽しい思い出を共有したり、世界中の旅人とつながって旅の情報交換をしたり…。

自分の旅の写真やコメントを記録して、友達や他のユーザーと旅の体験を共有することができます。また情報を得ることができます。
また、最近のソーシャルログインやゲーミフィケーションを取り入れおり、旅行記を記録したり、写真をアップしたり、コメントすることでマイルが溜まったり、ランクが上がったりバッジがもらえたりします。いままで数値的に旅の熟練度合いを記すメディアは無かったと思いますが、このアプリで一定の評価ができ、またパスポート替わりの旅ログになるかもしれません。
もちろん無料です。

使い方は簡単。

① まずはFacebookでログイン
する。

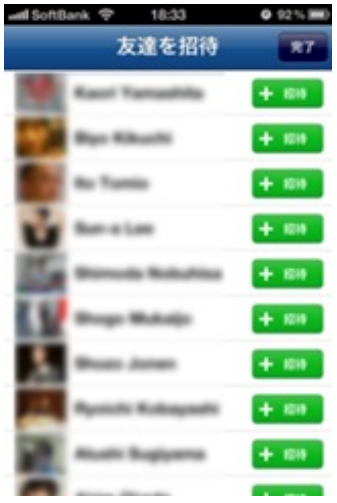
② 画面下のタブの「旅行記」をタップして直近の旅行記を付けてみる。

③ 出来上がったら、「ホーム」をタップして上部のマイルなどを確認する。

④ 「つながり」をタップして右上の「＋」をタップする。

⑤ 「友達を招待」をタップして、旅好きな人を選んで「招待」をタップする。

⑥ 「スポット」をタップすると見たい国の都市の情報を他のユーザーが書き込んでいるかもしれません。



2012年の5月にリリースしたばかりのせいか、当初サーバーエラーがよく出てたのですが、減ったようです。ユーザーとしては、「つながり」の機能をもう少し充実した方が良いような気がしました。特に知らない他のユーザーとのつながりが希薄なイメージでした。今後の発展に期待です。

http://tripking.net/

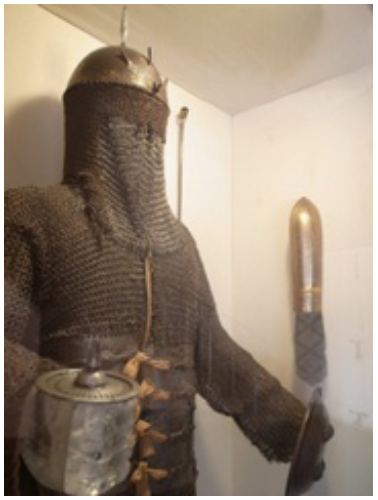
Chibirockの旅はくせもの

Chibirockの旅はくせもの
■ゲーマーよ、旅に出よ■

■Writer&Photographer
Chibirock
■Age
33歳
■Profile
Sigur RosとBeirut贔屓のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
http://blog.chibirock.net/

　ちびろっくはファミコンで育ちました。
　新しいことがどうも頭に入らないのは、ドラクエとFFの呪文名と効能とか、いきなりレベル２６からスタートできるふっかつのじゅもんとか、全く役に立たない名残ものがメモリを圧迫しているからである。ということにしている。

　ねだった覚えもないのに、ファミコンという夢のマシンがいつの間にかテレビにつながれており、ロードランナーで金塊を回収しまくった幼稚園時代。学校を休んでドラクエ３の発売日に高島屋に並んだものの、目の前で売り切れてショックと風邪で寝込んだ小学生時代。カート･コバーンの悲報を行きつけのゲーセンの店長から聞いた高校時代、あ、ここはもうスーファミ。
　しかし大好きであるはあるけど、それほど華麗なテクを持ち合わせてるわけでもないので、当時のシンプル極まりない８ビットゲームたちを攻略するのは至難の業。
　数センチの段差から落ちて死ぬ主人公、延々と続く迷路の中の、何の目印もない壁の中の隠し部屋、コンティニュー無しにも関わらずこちらに反撃の隙も与えない、血も涙もないボス達。
　懇切丁寧な最近のゲームとは全くの別物で、インターネットという神ツールもなかったあの頃、よくもまあ、こんなもん攻略できるか!!!!とキレずに毎日やったもんだと褒めてやりたい、自分を。



　今となってはそんな日々は遠い空の向こうだが、旅の途中、ふと思う。行く手をはばむ牛のウンコを巧みによけ、時にはその主の巨大な牛と対峙し、不毛な乾燥地帯に突如現れる小さな街に喜び、リキシャワーラーや商売人との戦闘で消耗したHP・MPを宿で回復、街なかでは「コリア？　ジャパン？」と毎日同じ奴に同じ質問を投げかけられ、親切な案内板とか無いから街の人から情報を得る……。これリアルファミコンじゃん！

　時には、博物館や街なかで武器や防具を見つける。「このくさりかたびらは約５００G、このドラゴンキラーは１５０００Gくらい、おや、この柱回したら奥の壁が開くんじゃ？　……」と一人ぶつくさやるのも本当に楽しい。インドはジョードプルにある丘の上の城の武器・防具コレクションは、ロープレ好きにはたまらない。

　かつて夢中になったゲームの世界を、まさか自分が大人になってから実体験するとは夢にも思いやしなかったが、ある意味ゲーマーの夢叶ってる。このままいくと最期は階段２、３段踏み外して死ぬか、転がってきた米俵に轢かれて死ぬか、そこら辺であろう。

　しかしこの生活に役立たない知識ぶんのメモリーを開放しないことには、若年性痴呆症の疑いがあるほどの物忘れが解消されないと思うのだけど、一体どうしたら忘れられるのか？　シラフで自分が言ったこと覚えてないとか、いよいよ本気で悩んでますので、情報お待ちしております。て、もう旅関係ねえし！

byからくり道中好きがこうじて一時期「ゴエモンさん」と呼ばれたこともある、ちびろっく

HANGOVER in the WORLD

HANGOVER in the WORLD

ウズベキスタンの酒

　ウズベキスタンは国民の大半がイスラム教スンニ派のイスラム教国である。朗々と鳴り響くアザーンを求めてラマザン中に訪れた。
　イスラム圏なのに酒？と訝る人もいるであろう。そう、ウズベキスタンはイランのような公には酒類を販売しない国々とは異なり、トルコのようにお酒に寛容なイスラム国なのだ。
　ウズベキスタンはかつてソビエト連邦に属していたことから分かるように、ウォッカが非常にメジャーな酒のようである。私はウズベキスタン滞在中ウォッカを飲む機会に残念ながら（？) 恵まれなかったが、友人曰くあのアルコール度数の高いウォッカをグラスに並々と注ぎ、それをガブガブと水のように飲むそうである。何とも恐ろしい話である。

　私の興味はもっぱらビールなので今回もビールついて記したい。ウズベキスタンはその土地毎のローカルビールが多数存在し、その銘柄毎に様々なバリエーションが揃えられている。私のようなビール好きにはたまらない国である(もっとも私の舌はそこまで敏感ではないので、どんな銘柄を飲んでも「うむ、美味い」と思って終わりである。非常に残念でならない)。

　まず全国的に飲まれているのがSARBAST（サルバスト）である。私がウズベキスタンで初めて飲んだビールもこのSARBASTであった。鷹のマークがなかなかクール。ウズベキスタン中で飲むことが出来るので困ったらSARBASTという安心感がある。一番メジャーなのが赤いラベルのSARBAST originalで、これには何と生ビールも存在する。アルコール度数は４.２％。飲みやす

いが、東南アジアのビールのように軽い感じではなく、なかなか飲み応えがある。SARBASTには青いラベルのSARBAST extra、緑のラベルのSARBAST special、そして黒いラベルのSARBAST strongなどがあり、それぞれアルコール度数などが異なり、飲み人の趣向・酒の強さにあわせて選べるので有難い。（因みにextraが５.６％、specialが５.０％、strongが７.０％）

　次にサマルカンドの地ビール、Pulsar（パルサー）。これもまた実に多くのバリエーションを抱え、ついぞ私は飲むことがなかったが、黒ビールまでそのラインナップに揃えているというのであるからなんとも驚きなのである。ベーシックな青いラベルでアルコール度数５.５％、ゴールドラベルで４.５％。SARBASTより安いので、サマルカンドではPulsarばかり飲んでいた。改めて瓶をよく観察するとラベルの上”In the best traditions of the Czech beer”と書いてあるのでチェコビールなのだろうか。どおりでうまいわけである。

　他にもブハラの地ビールにAZIA（アジア）という何とも旅人心をくすぐる銘柄が存在するようであるが、私は見つけることができなかった。一度ブハラでAZIAのロゴを掲げたお店を見つけ、ラマザン中にも関わらず思わずお店のドアを叩いたことがあったが、そこで供されていたビールはなんてことないSARBASTであった。いつか出会いたいものである。

　今回はウズベキスタン固有の有名銘柄のみの紹介となってしまったが、ウズベキスタンのビールのラインナップは特出すべきものがあるので、舌に自信のあるビーラーはぜひウズベキスタンまで足を運んで飲み比べをして頂きたい。きっとその品揃えの豊富さに驚かされること請け合いである。

※ ウズベキスタンはイスラム圏ではあるがラマザンはそこまで真面目にはやっていない。お祈りの時間を告げるアザーンも私が聞いたのはタシケントで一回だけであった。ビールに目がない私にもそれくらいの分別は持ち合わせていることを最後に弁明させて頂きたい。

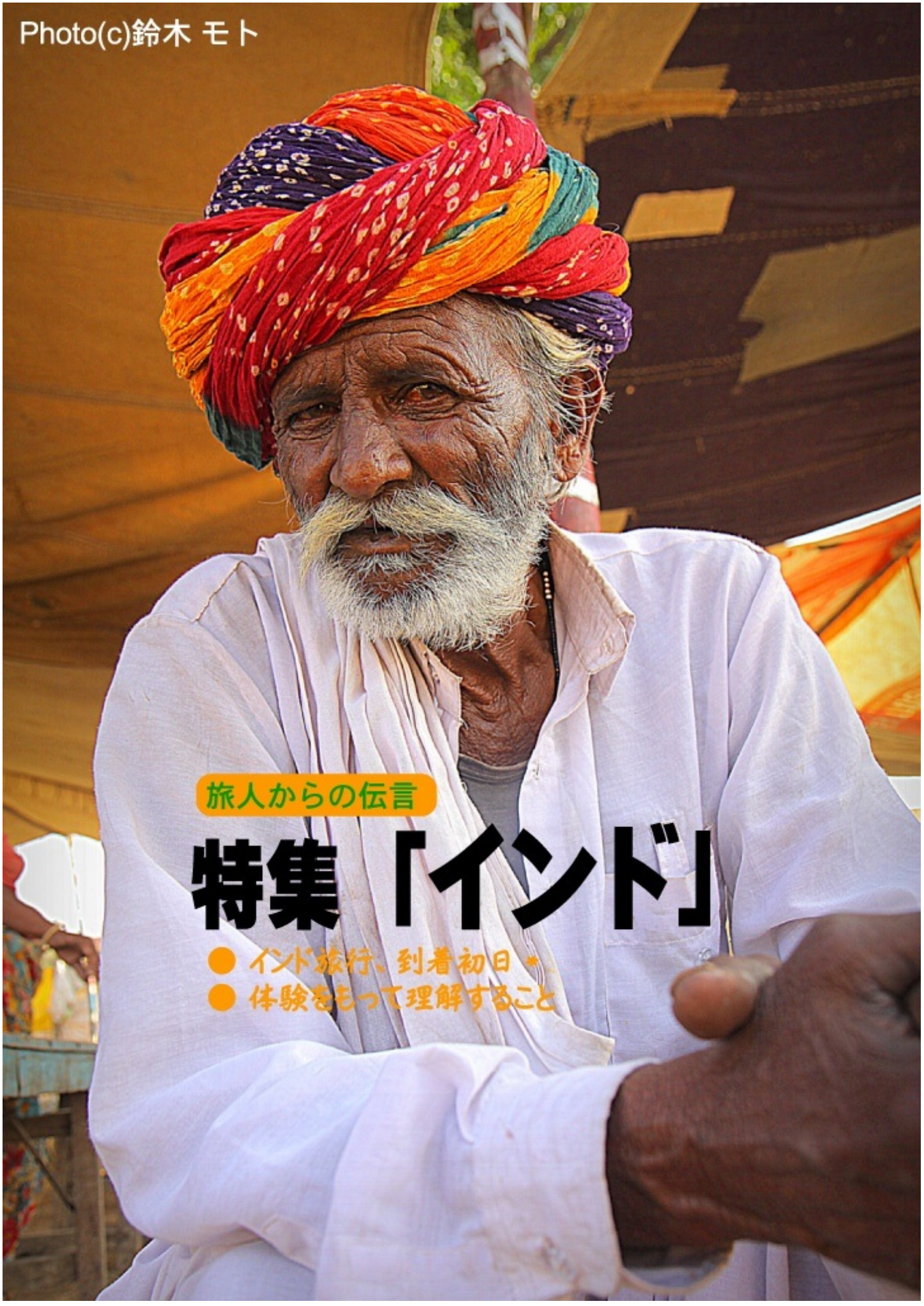
■Writer&Photographer

三矢英人

■Profile

大好きだった世界史の授業に出てくる数多の遺跡・建造物を自分の目で見るため海外へ旅立ち、その魅力にはまる。世界中の遺跡・建造物・自然・酒・飯を堪能するべくいつかは世界一周、と思いながら日々次の旅への思いを馳せるリーマンパッカー。Twitter:hideto328

http://twitter.com/hideto328


Photo(c)鈴木 モト
旅人からの伝言
特集「インド」
● インド旅行、到着初日
● 体験をもって理解すること

インド旅行到着初日＊

インド旅行到着初日＊

■Writer&Photographer
嶋津亮太
■Age
26
■Profile
Cafe Bar Donnaという店を経営。
劇団PRIMALの主催。
ブログ DONNA THE PRIMAL
http://premadonna.blog108.fc2.com/

３月５日ＰＭ１１：００

　サービス精神という概念が彼女達にはないのだろう。インドの航空会社の格安チケットのおかげで、乗り込んだ機内にいるキャビンアテンダントの接客の悪さに耐え抜き、僕はこのような結論を導き出すと同時に、デリーの空港に着いた。
「ここがインドか」
　空港内にある両替所で何のレートの知識もないまま薄っぺらの福沢諭吉を何百倍にもパンパンに厚みが出るほどのインドルピーに変え、そのガンジーの顔が描かれた玩具みたいな札束を握り締め、僕は外に出た。クラクションの音、音、音。そして見渡す限りインド人、インド人、インド人。香辛料の匂い。ここがインドだ。

　空港からデリーの市内までかなり距離があり、バスかタクシーかオートリクシャーと呼ばれる乗り物を使わなければならない。しかしどれだけリクシャーに話かけても全然相手にしてくれない。理由は簡単だった。モンゴリアン系の顔丸出しでバックパックを背負い、すでに何人ものタクシーの運ちゃんに群がられている奴の相手なんて、いくらインド式数学を自由自在に扱えるインド人だろうと、面倒なのだ。僕はリクシャーを諦めタクシーに託すことにした。彼らは市内まで３５０ルピーで行ってやる、と口を揃えて言った。むこうの物価はだいたい１００ルピーあたり３００円と考えてくれていい。１０００円ちょっとなのだけども、かなりふっかけられてる

ことは間違いない。僕は、
「エクスペンシブ（高い）」
　と連呼し続け
「１００ルピーしか払わない」
　と言ったが、それを聞いた運ちゃん連中は、ヘイヘイジャパニーズ冗談はよしてくれよ、みたいな感じで小馬鹿にされただけだった。１５分くらい値段交渉をして１００ルピーでＯＫだと言った兄ちゃんの車に乗り込んだ。運転手は観光客慣れしていると見え、フレンドリーにインドスマイルを駆使し英語で話しかけてくる。
「インドは何回目だい？」「どのくらい滞在するんだい？」「どこを訪れるつもりだい？」「日本ではどんな仕事をしてるんだい？」
　少々運転が荒いのと、その運転手がワキガであることを除けば、かなり居心地のいいタクシーだった。彼らインド人はサービス精神には欠けるが、フレンドリーであることには間違いない。彼との会話は楽しかった。
「１ヶ月だったらあそこは訪れるべきだよ」「あそこは物価が安いから楽しめると思うよ」「オイラもあの町には行きたいんだ」
　なんてことを運ちゃんが教えてくれて、お互いに話が盛り上がっていた時に車は止まった。
「ここが目的地かい？」
　とお金を払おうとしたら、
「いや違うんだ。場所が分からないからあそこの店で住所を聞いてくれ」
　と運転手。目的地が分からんて、大阪で言うとヘップ前みたいな場所を頼んだわけだぜ、何のジョーダンだ？　すると体の大きなインド人男性二人が店から出てきてタクシーに近づいてくる。やばい。これはあかんですよ！　これは店連れて行かれたら終わりですよ！　と心の中で誰かが騒ぐ。
「目的地までちゃんと行ってくれ」
「だから、道が分かんないんだって」
　そう言っている間に、イカツイ二人はタクシーのドアに手をかけた。僕は必死にドアが開かないように内側から引っ張り
「とりあえず車を出せ」
　と言うが、
「ノー、降りろ」
　の一点張り。するとマッチョが外から
「店の中に電話があるからそれでホテルを探せ」
　と言う。完全にハメられた！　いや、ハメられようとしている！　遂に僕は
「ええからはよ車出せや！　ここでは絶対降りひんぞ！」
　と声を荒げた。外から降りろと言ってるマッチョにもずっとノーと言い続けた。すると急に怒り出しヒンディー語で運転手になにか言っている。何を言ってるか完全に理解できない。もの凄い形相なので、おそらくはキレているのだろう。すると運転手は頷き、車を走らせた。

「おい、さっきの奴は何をしゃべっていたんだ？」
　と聞くと
「場所を教えてくれた」
　と誰が聞いても分かる嘘を透き通った瞳で言われた。
「よし、オーケーオーケー。俺はここで降りる」
　と言ったが、
「何言ってんだ。こんな危険な場所に降ろせる訳ないだろ。」
　と言われて車を止めようとはしない。
「ほら、あそこホテルだろ？　あそこに泊まるから降ろしてくれ」
　と言ったが、
「俺は場所が分かったんだ」
　と適当なことを言われ、心配しつつも降りようとするのをやめた。

　そう、それが最後だった。一度騙し掛けたインド人を少しでも信用した僕が馬鹿だった。車内は３０分前の明るい雰囲気が大昔に思えるような重い空気だった。車を走らせること２０分、ここだと降ろされた。僕は初めての知らない土地なのでそれを信用し、１００ルピーを払い、仲直りの意を込めてセンキューと握手をして降りた。
　辺りは殺伐としていた。僕は確かデリーの中心であるコンノートプレースに連れて行けと言ったはずだ。ホテルというか、店一つない。そして歩行者は東洋人の顔をした僕一人だ。
　あとで分かったのだが、コンノートからかなり離れた場所に放置されたのだった。その時の僕にそんなこと分かるはずもなく、ここがコンノートか、結構暗いな。と、自分を勇気付けるように一人言を呟きながら歩道に沿って歩き出した。
　すると暗闇に光る無数の点。何やあれ？　もの凄い勢いで点が近づき吠え出した。犬!!
「ギャン！　ギャン！　ギャン！　ギャン！」
　その瞬間脳裏に浮かんだ言葉は「狂犬病」。しかもその数は徐々に増え７、８匹の狂ったワンちゃん達にあっという間に囲まれた。
　こぉぉぉぉぉぉれぇぇはアカンですよぉぉぉぉ!!!!
「なんじゃコラぁ！　なんじゃコラぁ！」
　と言いながら戦意を見せつけるのだが、お構いなしに噛み付こうとしてくるワンちゃん達。ジャレとるんではないことだけは確か。日本より数倍ワイルドなインドの野犬。かなりのピンチ。そして先頭で吠え続けていた一匹が僕に飛びつこうとした瞬間、一台のリクシャーが目の前に止まり、インド人が飛び出した。そのオヤジは１０秒もかからず犬達を追っ払い僕の方に近づいて
「何してるんだ!?」
　と言った。

救世主現る

　空港で時間を合わせた時計を見ると既に１時半を過ぎていた。
「この辺りでホテルを探そうと思って」
「歩いてか？」
「そうです。この辺りにたくさんあるはずだから」
「おい、この辺りにホテルなんてないぜ」
「は？」
　オヤジは続けた。
「お前みたいなバックパックを背負ったジャパニーズが、こんな時間にガイドブックを持ちながら歩いていたら殺されるぜ」
「は？」
「いいから乗れ」
「いや、歩いていきます。バイマイセルフです」
「行くって？　どこ行くんだ？」
「コンノート・プレイスです」
「ヘイジャパニー、コンノートはこっからだいぶかけ離れてるぜ」
　僕はそう言われたけども、その前に一発騙されてるのもあってすぐにインド人を信用できる心境じゃなかった。僕はそのオヤジに
「俺は大丈夫だ」
　と言い歩き続けたが、オヤジはずっと付いて来て
「いいから乗れ」
　と五月蝿く言った。数十メートル歩いて無視し続けてるのにまだ付いて来るオヤジに、俺に構うな！　と言いかけた時、前方から４、５匹の野犬がやってきて吠え出した。オヤジはリクシャーから降り、またもや狂ったワンちゃんたちを一掃し、こちらを振り返り素敵過ぎるインドスマイルでウィンクした。
「コンノートまで」
「５０ルピーだ」
「５ルピーだ」
「３０ルピー」
「５ルピーだ」
「１０ルピー」
「言っとくけど、５ルピーじゃないと乗らない」
「オーケー。もう何も言うな。いいから乗れ」

　こうして僕はこのオヤジのリクシャーに乗った訳である。夜のデリーは似たような道ばかりでどこを通っているのか分からない。同じ道を何回も通られても距離感が全くつかめない。
「ヘイ、ジャパニー。何でこんなとこに一人でいるんだ？」
「あそこがコンノートだと思ったのさ」

「あのな、この辺はマフィアが山ほどいるんだ。お前みたいな旅行者すぐに身ぐるみはがされるぜ」
「……」
「ホント、俺がいてよかったな」
「……。コンノートまで早く」
「わかった。わかった」
　バリバリバリバリバリ‼　エンジンというものの原始的音というものはきっとこれに近いんだろう。安っぽい音とエンジンの臭いと、インド人のスパイシーな匂い。僕は今インドにいる。日本ではない別の国にいる。早くインド美人を見たい。くっきりとした目鼻立ち。透き通っていながらまどろんだ瞳。鼻ピアス。へそピアス。僕の脳みそがサリーに身を包んだインドの神秘的美貌を得た女性の姿に侵される。元来僕はインド系の顔立ちの女性に惹かれるようだ。だから友達と話してても、一般的美人とは少々ずれた女の子が自分の好みであることに気付いていたし、少なからずそのことに対して自負していた。未来の嫁はこの国にいる。その想いと言葉にならない決意を胸に、僕は関西国際空港を飛び立った。
「ヘイ、ジャパニー」
「……？」
「ヘイ、ジャパニー！」
「……ん？」
「着いたぜ」
　人から見れば邪念のような僕の信念に集中力を働かせすぎていたらしく、到着したことに気付かなかった。
「ここがコンノートだ」
　大きな建物が並ぶ。先ほどの場所とは全く違う、日本と比べれば全然ではあるが都会的な雰囲気。なるほどここがコンノート・プレイスか。
「ホテルは取ってあるのかい？」
「いや、今から自分で探すつもりさ」
「なんてこったい！　ジャパニーよく聞け、今日は３月５日。明日はシヴァラートゥリだ。ホテルなんて空いてないぜ！」
「え？　なんて？　しヴぁらーとり？」
「フェスティバルさ！」
　確かに３月６日はシヴァのお祭り。それでどこのホテルも満室だって？
「ヘイ、ジャパニー。もう夜中の２時だ。しょうがねぇ俺がホテルを探してやるよ」
　いい人。このオヤジいい人だ。僕は感動した。その前に一発ボディブローを喰らっていたので余計に感動が増した。このオヤジはちゃんと僕をコンノートまで送ってくれた。それに野犬も追っ払ってくれた。
「オヤジ、センキュー！」
　僕は再びリクシャーに乗り込んだ。インド人もいい奴いるんだぁ。感動も絶望も何が原因で、

そしていつ、どこからやってくるのか分からない。それが旅なんだと初日の到着３時間後に知った。「オヤジ、お金があまりないから安いとこ探してくれよ」
「おう。だけどフェスティバルだから難しいぜ」
　オヤジは屈託のない笑顔でリクシャーのハンドルをきる。結構なスピード。風が直接車内に入るのでそのスピードを肌で感じる。今頃日本は寒いんだろうなぁ。そんなことを考えながら春先の夕暮れのような生暖かいインドの空気と遊んでいた時に体に衝撃が伝わった。
　ドォォォン！！　何だ!?　リクシャーに何かがぶつかった。そして僕はその何かをこの目で見ていた。人だった。うん、インド人だった。結構なスピードでインド人を撥ねた。そしてリクシャーは止まることを知らず走り続ける。オヤジが笑顔で振り返り
「アーユーオーケー？」
　と聞いた。僕は
「えぇぇぇぇぇぇ!!!!」
　と、驚いてオヤジに
「あれヤバイやろ？　大丈夫なん？」
　と咄嗟に日本語で聞いたら、爆笑しながら
「ヤァ（ＹＥＳ）ヤァ（ＹＥＳ）」
　とオヤジは答えた。僕は日本語で
「ほんまオッサン適当やなぁ！」
　と言うと、オヤジはまたもや
「ヤァ！　ヤァ！」
　と爆笑しながら答えた。かなり楽しかったようである。僕は苦笑いもいいとこだったけど、オヤジの笑顔を見ていると気持ちが癒された。
　オヤジはかなりホテルを探してくれた。７、８件回ってくれたがどこも満室だと言われた。オヤジは親身になりながら
「明日がフェスティバルだからなぁ」
　と自分のことのように残念がってくれた。そして気付いたら旅行会社の前にリクシャーを停めていた。
「ヘイ、ジャパニー。ここでホテルを探してもらうんだ。」
　僕の精神は日本からのエコノミー席での８時間の旅に続く、タクシー事件、野犬対決、ホテル巡りに疲れきり、どうにかなるだろうと中に入ったものの、案の定高額ツアーを組ませる悪徳旅行会社のトークを冷静な耳で客観的に聞いていた。
　アホかと。亮太お前はアホかと。インドに何しに来とるんやと。僕の中のもう一人の僕が耳打ちし続ける。明日はフェスティバルだからホテルはファイブスター（５つ星）しかないと簡単に片付けられ、どういうコースでインドを回るかと懸命に聞いてくる男の声が遠ざかっていく。
　僕の頭の中に一つの疑問が浮かぶ。考えたくないことだ。とても嫌な気持ちになることだ。それは、なんであのオヤジは僕をここに連れてきたんだ？　というクエスチョンだった。時計を見ると４時過ぎ。あと少し。あと少しだ。電車が動く時間になれば早いとこ、こんな町出よう。そ

の想いだけが毎分毎秒膨らんで行く。そして目の前の明らかに高額な料金でタージマハルへ連れて行こうとしている男の声と目つきに腹が立ち
「聞け。俺はツアーに入らない。絶対に、何があっても、ツアーは組まない」
　と言った。すると男は
「お前みたいなやつは出て行け！　二度とくるな！」
　と逆キレしだした。僕は平然とした態度で店を出て通りを歩く。ここがどこだか分からないが、あんなとこにいるよりはマシだ。
　犬が吠えている。少し怖い。真っ暗闇を一人歩く。何か柔らかいものを踏んだ。臭う。よく分からない。２、３歩歩く。靴の裏に着いた柔らかいものが潰れる。臭いが爆発する。くさい。これは、うんこだ。何のうんこだ？　僕はインドで騙されて、騙されて、犬に怯えて、うんこを踏んだ。
　旅は、あと３０日ある。僕は一体あと何回騙され、犬に怯え、何から出てきたのか分からないうんこを踏むのだろう？　まだカレーも食べてないのに、口の中が辛くなった。すると後ろから聞き覚えのあるバリバリバリバリという音。
「ヘイ、ジャパンニー」
　さっきのオヤジだった。こいつも結局は僕を騙していたんだ。僕は
「向こうへ行け」
　と、言った。するとオヤジが
「俺の友達のホテルが一部屋空いてるんだ。今取ってもらってるんだけど行かないか？」
　と誘った。そして僕はもう１度騙される。

救世主の正体は詐欺師

　僕は疲れもあり、野犬の怯えもあり、うんこもあり、オヤジのリクシャーに乗るには充分過ぎる要因を持っていた。オヤジは今までとは比べものにならないくらい真っ暗闇に包まれた道を、インド人を撥ねたリクシャーで走り抜ける。僕の反撃は、そのオヤジのリクシャーに靴の裏のうんこを擦りつけるくらいだった。正直このオヤジが向かってる先が怖かった。本当に人気のない、そして明かりのない、狭い道を行くのだ。僕はインド美人を拝む前に命を断つかもしれない。その不安はいくら拭っても拭いきれず、確実に増える一方だった。真っ暗闇の中リクシャーを停める。
「降りろ。ホテルだ」
「降りない」
　僕は怖さのあまり駄々をこねた。それが１０分続いた後、僕は降りて本当にホテルがあって胸を撫で下ろした。そして高額なホテルの一室にサインをし、オヤジに１００ルピー払い、明日絶対にデリーを出るという決意を胸に眠りに落ちた。

　あとで旅をしている日本人に聞いて分かったことなのだが、３月５日のこの夜、どこのホテル

も普通に空いていたらしい。リクシャーのオヤジとホテルマンの口裏あわせで満室にされていたのだった。そういう詐欺が主流であることを、日本で全く予習していなかった地球の歩き方を読んで知った。僕は次の日から、受験生並にこの本を読みつくすことになる。そしてデリーへのリベンジを決意する。

体験をもって理解すること

体験をもって理解すること

■Writer&Photographer
田中美咲
■Age
２３歳
■Profile
少しでも多くの人が心からの幸せであれる世界を創りたい。
渋谷で働くバックパッカー、です！
▽Keyword：
バックパック旅(221日6大陸12旅26カ国63都市)/瞑想修行(Vipassana)/全米NLP認定コーチ/LABプロファイル資格取得/前世はインドの姫/三軒茶屋シェアハウス
▽blog：
http://ameblo.jp/awesome-misaki/
▽三軒茶屋シェアハウスBLUEHOUSE：
https://www.facebook.com/sharehouse.BlueHouse

■インドとの出会い
　これまで、どんな地域に行こうと病気にならない自信があった。それが仇となったインドでの出来事と、それから大好きになったインドのことを話そうと思います。
　まず私は初めてのインドで、雨期に無理やりガンジス川を横断しようとして(というか騙されて)溺れかけて、本気で死ぬかもしれないと思った経験をしました。そこでいろんな人に助けてもらって心を癒してもらい、インドが好きになりました。
　そこから、前世が見える人からは「インドのお姫様だったわよ」と言われたり、ご縁があって瞑想やヨガを始めたり、どんどんインドに呼ばれていくのがわかりました。

■初めての感染症

　初めてインドに行った時にお世話になった人たちに会うため、２回目のインドではガンジス川のあるバラナシに２、３週間ほどいました。火葬場やガンガーの近くでぼーっとしたり、自分の思うがままに行動していて、虫よけとか日焼け止めとか、女子ならやるべきだろうことは一切せず、欲望のままに暮らしていました。

　ある日、なんだか体全身がだるくて、「あー水がいけなかったかなー」と思ったものの、お腹が痛くなるのにも慣れていたので放っておきました。そして、どんどん体が動かなくなってきて、熱を測ってみると４１度も！

　立ち上がると気持ち悪くって、めまいと吐き気があるので何も食べれず。バファリンをとりあえず口にほおりこんでいました。それでも全く治る気配がないので“現地の病は現地の薬で”とどこかで読んだ覚えがあったので、仲良くさせてもらっているインド人の友人に病院まで連れて行ってもらいました。

■デング熱の症状

　４０度以上の熱が２週間続き、一度３７度くらいまで落ちるがまた４０度を超える。全身が乾燥しだして、乾燥した肌の切れ目から血が出てくる。座っているだけでも気持ち悪くて、左脳の情報処理する力はほぼなくなる。※実体験

　デング熱(デングねつ、dengue fever)は、デングウイルスによる感染症。一過性の熱性疾患で、東南アジア・インド・中米・南太平洋などに広く分布する。近年の熱帯・亜熱帯地域の都市部におけるアウトブレイクには、急激な都市化が関連している。現在のところワクチンはない。※参考：wikipedia

■インドの病院でデブ熱と言われて

　インド人の友人に、お医者さんから伝えられるヒンドゥー語を訳してもらっていたらこう言われました。　・インド人：「オマエ、ソレ、デブ熱ダゾ」

・私　　：(ああ、デブがなる熱ね。ってなんだそれ！)
・インド人：「デブ熱、dengue feverダヨ」
いろいろ日本語で伝えようとしてくれたけれど、英語で言われた方がわかった。めまいがして思考停止してる状態でもイラっとしたので、あー私まだ生きてるなと感じました。
・医者　　：「注射２本打つのと、薬あげるね」
そんな重症か？　と思いながら、それがなんの注射なのか、薬ってなんのためになるのか全くわからなかったけれど、それを聞く体力も余裕もなかったので全てうなずき、ベットに横になりました。そして、注射は腕に打つものだと思っていた私の価値観は覆され、インド人が数十人見ている病院で半ケツにされ、幾度となくケツを揉まれ、右ケツと左ケツに１本ずつかなり大きい注射を打たれました。
自分が理解していないものを体の中に入れられる恐怖と、数十人のインド人にケツを見られている理解不能な状況と、めまいと吐き気に苛まれながら、治療が終わりました。

実はその後、その注射がインド人用だったためか、私には強すぎて貧血を起こして病院内で倒れました。なんだこれ。
・医者　　：「チャイ飲んだらなおるから大丈夫だ」
・私　　：(えええええええええチャイ頼みかい!)
もうここまで来ると、何を信じていいのか何が何だかわかりませんでしたが、ただ白衣を着てる人は信用していいかという無謀な考えに身を託しました。

■迫るダージリン行きの深夜特急
おしりに注射を打ってもらい、お薬ももらって、ゲストハウスでゆっくりしていたのも束の間。その１日後に出発するダージリン行きの深夜特急のチケットを取ってしまってました。この気持ち悪さのまま、チケットを無駄にしたくない想いを優先させ、飛び乗ることにしました。
深夜特急の揺れがまたデング熱を絶好調に発症させました。スリーパークラスを取っていましたが、結局ほとんどトイレにいました。そしてダージリンに到着し、６人乗りの車に１５人くらい乗ってダージリンの街に何時間もかけていきます。
この時点でわかると思いますが、インドの汗臭さと砂と密集した空間を何時間もキープし、さらに整頓されていないでこぼこ道を走り続けることは今の私には殺人的状況ともいえました。
ゲストハウスにようやく到着すると、めまいがきつくなり、せっかくのダージリンの滞在をほとんどベットの上ですごしました。それでも、周りの旅人やゲストハウスの人たちが食事を管理してくれたり、お見舞いにきてくれたり、マッサージしてくれたのでなんとか少しずつ体調は戻り、日本に帰れるくらいまでの回復ができました。その時一緒にいた方々、ありがとうござい

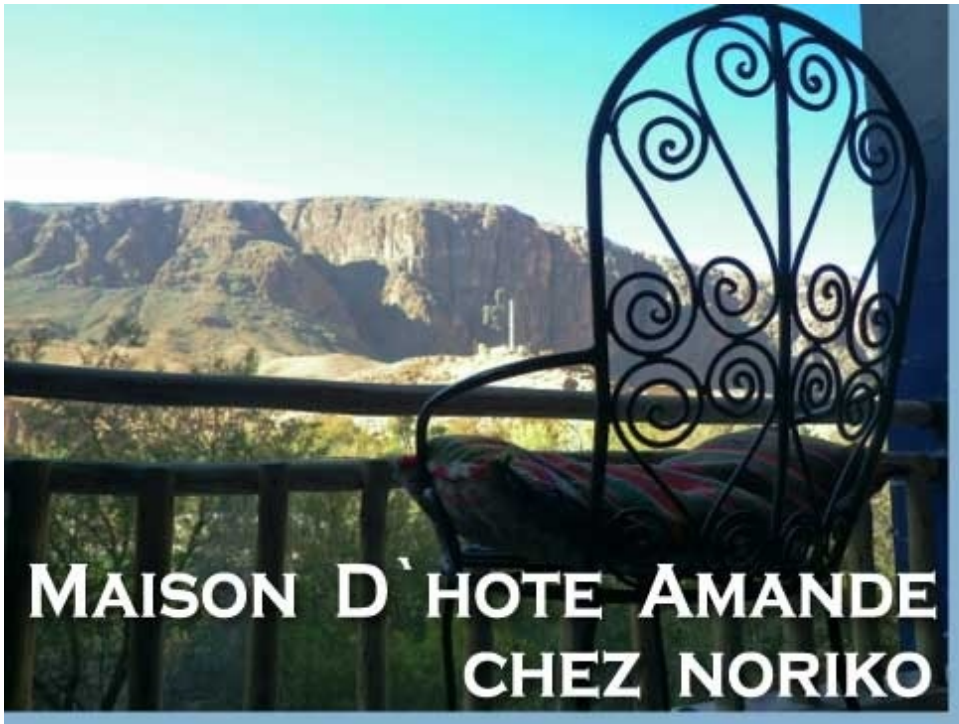
ます。体重は１０kgも落ちてしまいました。笑

■人のありがたみと生きていることへの感謝

　こうして、清潔感のない場でも、親が近くにいなくても、医療への信頼が築けていなくても、人をすごく大切にするインド人の性質と、旅人達の旅を通して培った生き抜く力と支え合う意識は、私の心を癒してくれました。

　自分は自分、他人は他人という考えで共通するインド人と旅人は、何かあれば自分の事をおいてでも駆けつける、その相手をとても重要な人だと考えることができるすばらしい信念と価値観をもっていると体験をもって実感しました。

　どんなに表面的に大切にしたとしても、重要なときにそれが出来なければ意味がない。それを知っていて、行動にできている人たちの中で旅をすることで、自分を見つめ直し、今の世の中に足りないものを見つけ出すことが出来たと思います。



<広告>

「モロッコのグランドキャニオン」と呼ばれるトドラ渓谷までのんびり徒歩30分で行ける日本人が経営するアットホームな宿。
バルコニーからは一枚岩が眺められ、手前の畑にはアーモンドの木々が見え春にはサクラのような花が咲き花吹雪を楽しむことができる。

◆料金◆
宿泊代　70DH
朝食　　20DH
夕食　　50DH
洗濯機使用料　10DH

◆設備◆
部屋数4室
サロン
大きめのバルコニー
Wi-Fi
シャワー室・トイレ共同

日本食もO・K

家庭的な
小さな宿

◆住所・お問い合わせ◆
住所
Ait Ousalene Tizgui TINGHIR 45800 MARO
電話番号
＋212(0)6 7040 4369
＋212(0)6 5319 5219
モロッコ国内からは0653195219
E－MAIL
amande@hotmail.co.jp

詳しくはホームページで
http://amandecheznoriko.web.fc2.com

MOROCCO
TODRA GORGE

インドと青春と韓国

■Writer&Photographer
鈴木モト

■Profile
男性　静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84（100M）
美容師免許、管理美容師免許取得。
MIXIコミュニティー、「鈴木の書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。
http://mixi.jp/view_community.pl?id=3502328
現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。
ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」
http://ameblo.jp/roundtheworld200130/

『恋ヲ　シマシタ』
　彼はつたない日本語で、少しうつむきながら、恥ずかしそうにそう答えた。
　インドの砂漠地帯に、俺とみつまは、３週間ほど滞在した。

　黄土色の乾いた砂漠の大地に、
　ビビットな色のサリーを着た女性達が、壺瓶を頭の上に抱え、水汲みをしていた。

　カラフルなサリーが、単色のつまらない砂漠の色に映えて、
　本当に美しかった。

　そして、インドの砂漠地帯から、首都のデリーに戻る列車の中で、俺は彼と出会った。

韓国人の彼は、大学で日本語を学んだらしく、ほんの少しだけ日本語が話せた。

彼はニコンに勤めていたが、仕事を辞め、一ヶ月かけインドを放浪し、これから韓国に帰る所だと言った。

夜行列車に１３時間ほど揺られ首都のデリーに着くと、俺とみつまと韓国人の彼で、タクシーをシェア。

移動の時って、１人よりも２～３人居た方が、本当に楽なんだよね。

乗り物をシェア出来るから安く済むし、１人よりも安全性が上がる分、気を張らなくてよい。
トイレに行く時、誰かに荷物番を頼めるのも本当に楽。

俺はよく１人で１年間も、ユーラシア大陸を放浪していたなと、何だか不思議に思ってしまった。
荷物番を頼む相手が居なかったから、重たいバックパックを背負いながらしょんべんをするのは、本当に大変だった……。

そしてタクシーを降り、安宿にチェックイン。

この日の夜の便で韓国に帰る彼。

部屋を取ろうか迷っていたので、俺達の部屋に荷物を置かせてやり、シャワーを使わせてあげた。
そして彼に、一ヶ月のインドの旅はどうだったかと尋ねると、

『インドはすべてがベリーハードでベリー疲れる。韓国は素晴らしいって今気がついたよ』

と、明るい表情でそう語った。

　リキシャーに乗って（バイクタクシーみたいなもん）目的地を言っても、まっすぐ目的地には連れて行ってもらえず、
　お土産屋を連れまわされ、それでいて多額のお金とチップを強要される。

　韓国では、タクシーに乗ってもそんな事はまず無いから、韓国は素晴らしい所って言ってた。笑
　だから俺も『すげーー解るよっ！』って、心の底から言ってしまった。

　そして彼はつたない言葉でこう言った。

『僕ハ、５日間、恋ヲシマシタ』

『こ、恋？？？』

　聞く所によると……、
　インドのダラムシャラーと言う所で、ボランティアをしていた女性と仲良くなり、５日間を共に過ごしたそうな。

　きっと、一緒に観光や買い物をして楽しかったんだろうね。

　そして、最後の５日目に彼女と結ばれたって、日本語と英語を混ぜて説明してくれた。

『アジアの中のラテン』と言われている韓国。

恋愛表現が豊かでストレート。

日本と韓国は文化は似ているけど、シャイな日本人の気質とは少し異なる所。

そして彼は、『最後に彼女とメールしてくる』と言って、部屋を出て行った。

そして２時間後……、
彼は頭を抱えて帰ってきた。

『ど、どーしたー??』

『実は……』

彼の説明によると……、
彼女にメールした後、電話屋を探し、彼女に電話したらしい。

でも彼女は、何やら悩み事がある様子で、落ち込んでいたらしい。

そして彼女は少し冗談ぽく
『韓国には帰らないで』と言ったらしい。

彼は、部屋のベットに腰をかけ、バックパックを抱えながら
『彼女に会いたいんだけどどうしたらいい？』
と俺とみつまに相談してきた。

そんな相談されたらさ、言う事は１つだよね。

『彼女の事が好きなら会いにいけば？　今日の航空券は捨てて、また買えばいい。お金は簡単に稼げるよ。今日行かなかったら一生後悔しない？』

と……少し熱く語った。

そして３０分後……、

彼は、愛する彼女の居るダラムシャラー行きのバスのチケットを取った。
彼女に電話もしたって言ってた。

彼女びっくりしてたけど、すげー喜んでくれてたって。

韓国人の彼さ、
俺に『どうしたらいい？』って相談した時点で
多分、答えは決まっていた気がする。

彼は俺に相談したんじゃなくて、背中を押してほしかっただけ。
『会いに行け!!』って言って欲しかっただけ。

そんな気がした。

そしてその日の夜、彼は韓国行きの飛行機のチケットを捨てて、
ダラムシャラー行きの長距離バスに乗り込んでゆきました。
青春してるなーと思いながら見送りました。

旅は、別れもあれば出会いもある。

韓国人の彼とは連絡先を交換しなかったから、この後どうなったか解らないけれど、

トホホな話

今だから笑える、本当にあった
トホホな話

旅をしていると、日本ではとてもありえない事に遭遇したりする。
そして、時に泣き、怒り、落胆し、呆然とし、赤面し・・・。
そんな旅の猛者たちのトホホな話をTwitterで集めました。

http://twitter.com/Or1en10
初海外初一人で真昼間のカオサンで睡眠薬入りビールなーう＼(^o^)／話せば長くなるんですけど、なんとか意識もうろうになりながら逃げ切りました！笑（；゜ 0゜） 次の日速攻カンボジアへ避難しました！笑 その時は怖くてたまらなかったんですけど、今となれば笑い話です。笑

http://twitter.com/ZedTeppelin
ニュージャージー初日、モール内のトイレでの出来事。自分はドアを閉め便座に落ち着いた。うつむき加減にボンヤリと映る何か? ふと閉めたドアに目をやると一面デカデカと描かれたハーケンクロイツ…人糞で…カピカピの無臭でしたが…

http://twitter.com/bashiobashi
インドのジャイプルで泊まっていたホテルのプロパンが爆発して、荷物も全てホテルに置き去りにした件です。その後、宿泊客は、逃げるようにキャンセル。しかし、私は店主の苛立ちにしぶしぶ一泊しました。あの旅は、ひどかったです。駅では中国人に恨みのあるインド人が、私をチャイニーズと思ったのか、怒鳴るわ殴りかかるわで、結局、インド人に助けられましたが.....！でも、旅は楽しいから、やめられましぇん！

http://twitter.com/Ystk4114
よーしっ！ウユニいくぞーって意気込んで出発し、トランジットのマイアミでパスポートすられたこと！終わったって思ったが実は始まってなかった！

トホホな話を募集しています。

Connection6　　「Turkey, ＞＞＞5935km」

功：ポルトガルから自転車をこぎ続けること６０００キロあまり。いよいよヨーロッパを走りきり突入した、ヨーロッパとアジアの交差点、トルコ。
儀：もちろん僕らはトルコは初めて。トルコのイメージは最初なんとなくエキゾチックで神秘的なイメージを持っていたのですが、僕らが見たトルコは、いやはやなんともそんな崇高なものとはかけ離れたとこでした（笑）もちろんいい意味でですが。
功：結論から言いうと、トルコは僕たちの最もお気に入りの国になりました。
儀：ええ、間違いなくナンバー１です。
功：とにかく毎日が予測不能。自転車を走らせているだけで毎日何度も面白い出来事が起こる。
儀：何がそんなに面白かったのかというと……
功「人」です。
儀：とにかくトルコ人はやさしくて、陽気で、フレンドリーで、おしゃべり大好きで、ほどよくテキトー!!　笑
功：１０キロおきに「おーい日本人ー！　止まれー！　お茶飲んでけー！　飯食ってけー！」と全力で呼び止められるもんで、なかなか前に進めませんでした（笑）
儀：道端では、いたるとこでおじさんたちがチャイ（トルコの濃いめの紅茶）を片手におしゃべりしていて、それに巻き込まれるのです。
儀：彼らはトルコ語でおかまいなしに僕らにがんがん話しかけてきます。だからこっちも負けじと日本語でがんがん話しかけてやります。すると、お互い９９％話がわからないのになんとなく気持ちで伝わるほんの１％の部分だけで笑い合って、打ち解け、仲良くなれてしまいます。
功：ただふらふら町を歩いてるだけでもどんどん話しかられるので、どんどん知り合いが増え、ドライブに連れて行ってもらったり、家に招かれて食事をしたりということもしばしば。今日はどんなおもしろいトルコ人に会えるのかと、毎日楽しみでした。
儀：ただ陽気なだけじゃなくてとても親切な彼ら。「君たち、お腹が減ってるだろう。このパンを持って行きなさい」という感じで、頻繁にエキメッキというトルコのバカでかいパンを恵んでくれます。当然、二人じゃ食べきれるわけもなく、自転車のうしろにどんどん新しいパンが積み重なって行く……
功：パン屋さんさながらでパンを運びながら自転車を走らせてたね（笑）

儀：おかげで食料に困ることはなかったけどね（笑）

功：そんな快適なトルコ、サフランボルトいう美しい町での出来事。トルコのお土産屋さんを営むメヴリットさんの言葉が僕は忘れられない。

「わたしは日本人を、日本を本当に大切に思っている。だから一生懸命日本語を学んで、少しでも日本から来た観光客のみんなに、あー楽しかった！　って思ってもらえるようにしている。でも昨日、トルコ語がわからなくて困っていた日本人観光客に『困っているならお助けしますよ』と話しかけたところ、『この人、日本語しゃべれるよ、危ない、逃げよう』って言われた。
　私はそんな人間に見えますか？　どうして私がそんな風に言われなければいけない？　私はただ、日本人を助けたかっただけなのに」

儀：たしかに、ガイドブックには日本語を使って騙そうとする地元民がいるから注意してという記述がある。（そもそもその書き方も問題ある気がするけど）
功：特に女性は安全を考えて、人との関わりには慎重になった方がいいときもある。けれど、ぼくはみなさんに伝えたい。

「ガイドブックなどの情報ばかりを信じるのではなく、自分自身で、その土地の治安はどうなのか、住む人はどんな人たちなのか、感じ取る努力をしてほしい」

儀：自分の心を開いて地元民と接することができたら、きっと旅はもっともっと楽しくなる。出会いって素晴らしいんだから!!

Connection of the Children
http://coccoccoc.web.fc2.com

田澤儀高

横浜国立大学大学院音楽教育専攻一年。ピアノと自転車旅が大好き。小さい頃からチャリで遠出するのが趣味。将来は学校の先生になって音楽の素晴らしさを子どもに伝えたい。そしてユーラシア横断の旅で感じてきたことも。

加藤功甫

横浜国立大学大学院一年休学中。保健体育科専攻。出会いに感謝し、日々邁進中！つながるって楽しい！！自転車旅/ボルダリング/生花/写真/読書/料理…

加藤功甫
田澤儀高 共著

十一ヶ月、31カ国、20000Kmのユーラシア大陸横断の旅は奇跡の連続。
その中で実施してきた世界の子どもを繋げるプロジェクト。
1本の糸で世界の子どもを繋いだ結果は・・・

小誌Braliに連載中の彼らが成し遂げた長い道のり。ぜひご覧ください。

自炊派の手料理

自炊派の手料理
旅に出たら現地の料理を食すに限る。でも物価の高い街での長めの滞在となると、さすがに外食ばかりはフトコロに堪える。そんな時は自炊。簡単で安くて美味しい自炊派の手料理をご紹介。

「丸々トマトの冷製スープ」
暑くて食欲がない時に最適。
これからの暑い時期に冷えたビールと一緒に食べると最高です！！

材料
■トマト・・・４個
■タマネギ・・1/4個
■ニンニク・・１片
■オクラ・・・１本

■コンソメ・・２個
■塩胡椒・・・少々
■水・・・・６００ml

作り方
①鍋に水（６００ml）を沸騰させてから、コンソメ、みじん切りにしたニンニクを入れ塩胡椒で味を調え冷やします。
（少し濃い目の味にしておくのがポイント）

②別の鍋で水を沸騰させてからお湯の中にトマトを５秒程入れて皮をむきます。この時オクラも茹でておきます。
（トマトのへたにフォークを刺して火に炙っても簡単に皮がむけます。）

③冷ましたスープの中にトマトがひたひたに浸かるようにして冷蔵庫で冷やします。

④しっかり冷えたら刻んだタマネギとオクラを添えて完成！！

キンキンに冷やせば冷やすほど美味しいです。
１日スープに漬けておくと味がしみて、更に美味しくなりますよ。

情報提供
谷津　達観（やつ　たっかん）
懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、夫婦で世界一周の旅に！！
現地の食材や料理を学びながら、403日間、35カ国を周る世界一周の旅に行ってきました。
「家から徒歩1年☆たっかんとじんみの2人世界一周」
http://ameblo.jp/worldjourney2010

酒と女と泪とカマボコ

■Writer&Photographer
沢井ブルース
■Profile
旅する武術家　空手では国際大会優勝経験アリ
現在は東南アジアを中心に放浪及び武者修行中
ヘタクソな文章ではありますが、気楽に読んでもらってBraliの中の「箸休め」的な存在になれたらなーと思ってます
人生、酒と泪と旅と武術　梵我一如　覚有情

「酒のない人生なんて、光の入らない洞窟に一生閉じ込められるようなものだわ、そうでしょう？」
　アンジーがよくそう言っていた。
「日本では酒好きは『酒なくて、なんの己が桜かな』って言うんだよ」
　と僕が言うと、アンジーはうんうんと頭を振って
「さすがに日本人って思考がスマートだわぁ……惚れ惚れしちゃう」
　と言うのだった。何が惚れ惚れするのかよくわからないが、連日酔っぱらいなアンジーは言動も行動も危なっかしく、ここカオサンロードの安宿内でも厄介者的な存在だった。
　ただなぜか僕とは気が合いよく飲みに行った。お互い「はぐれ者」という共通点もあったからかもしれない。
　アンジーは「クレイジーな酔っ払い」僕は「わざわざ日本からムエタイ（タイ式ボクシング）を習いに来たクレイジーな東洋人」という具合に……。

　アンジーは酒を飲むとよく泣いた。
「アタシだって本当は酒なんて飲みたくないのよ……」
　父親がとんでもない酒乱で、それが原因で両親は離婚したそうだが、
「だからアタシは飲んで飲んで飲みまくって酒に復讐してやるの」
　と言ってまたまた泣くのだった。
　もちろん飲みながら……だ。

　アンジーはカマボコが大好きだった。特にカニカマボコが。
　アンジーが泣きだすと、僕はいつもカニカマボコが入っているヌードルを注文し、
「ほらアンジー、カマボコだよ〜」
　と目の前に差し出す。
「カマボコー！」
　アンジーが泣くのを止め、極上の笑顔でカニカマボコを食べはじめる。
　たまにカマボコ欲しさに嘘泣きをするが、それを指摘するとアンジーはちろっと舌を出し
「バレちゃった？」
　と言うと、
「ブルース！　ブルース！　ほら乾杯！　カンパーイ！」
　と言って自分のグラスを挙げ、ごまかすのが常だった。

　あれから十数年、僕はまたカオサンに戻ってきた。十数年前と違い、一大歓楽通りと化したカオサンロード。もう今ではアンジーほどの酔っ払いもめずらしくない。アンジーは今はどうしているんだろうか。
　僕はアンジーの本当の名前も年歳も、どこの国から来たのかも知らない。
　ただ僕は、アンジーがカマボコが大好きだったってことは知っている。

　そして彼女のとびきりの笑顔も。

チベットぶっちぎり日記 vol.1《チベット・ラサ〜シガツェ編》

■Writer&Photographer
Chibirock
■Age
33歳
■Profile
Sigur RosとBeirut贔屓のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
http://blog.chibirock.net/

　ツアー３日目、ショッピング天国ラサを出発。１００％の確率で、なにがしかの汚物が待ち構えているトイレの宿ともお別れ。今日はなんとかっていう湖、ギャンツェとゆう街を経て、シガツェまで向かいます。ラサの次にでかい街とかじゃないとか。

　他人ごとだなお前、とお思いでしょう。

　いつか行くだろうと思いつつ、突如来ることになったもんだから、チベットに関する予備知識は限りなく無に近いです。辛うじてダライ・ラマ１４世の自伝を読んで、講演会に行ってみたくらいで、ガイドブックも読んでなく、連れてかれるままの場所を楽しむ流れとなっておりますので、あらかじめご了承くださいまし。

　モモ（餃子みたいの）か、粉間違えてるYO!とシェフのひとつも呼びたくなるほどズイマーな麺しか選択肢がなく、すでにウンザリなチベタン朝ご飯後、いよいよチベット深部へと出発。
　車窓に流れるのは、ドイツのように美しく整備された道路……！（行ったことはない）軽井沢みたいな並木道……！（行ったことはない）
　あんまり穏やかだからウトウトしてたら、いつのまにか一面マッチロ雪景色！
　軽井沢から急激に標高が上がった結果だが、あんまりの白さにクラクラ。ゲレンデとか行かないから、雪景色慣れてなくて目が痛い。

後から知ったけれども、これが「トルコ石のような青さをたたえたヤムドク湖」だったらしい。ほとりには、ヤクと写真を撮らせて金を取るヤクオーナーが待機しており、同じく写真モデルとして待機中のチベタン・マスティフなる馬鹿でかい犬が、その身体に似つかわしいボリュームでひっきりなしに吠えまくっている、そんなどうでもいいシチュエーションで、テンションは上がらず。

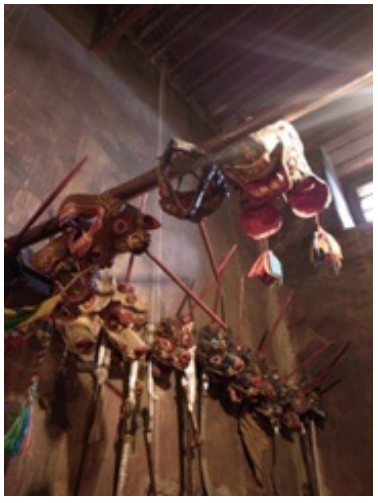
選択の余地無く連れていかれた、かわいらしいけど値段はかわいらしくないレストランでお昼。運悪く、フランス人団体客と鉢合わせし、完全に忘れられたわれわれ小日本人客。

そこにあるのをよそうだけなのに１時間近く待たされた。会計の端数１元（１２円）のオマケと簡単な謝罪を受けたが、謝罪の言葉があっただけ、マシと思おう。１ヶ月以上の中国生活のおかげで、だいぶ忍耐強くなったものだ。

途中下車の街、ギャンツェでは、いつも通りにチベタンな寺を訪れ、そっから山の上のオールドタウンを眺めた。もはやありがちな形容ではありますが、宮崎駿の世界！

大人になって、あのアニメの世界を実際に目の当たりにしちゃうとは、初めてナウシカやラピュタを観た少女時代には想像もしなかったね。

どこの寺もバターの匂いで充満して、床はラーメンブームの遥か前から豚骨一筋でやってる幹線道路沿いのラーメン屋のごとくヌルヌル。なぜって、通常ロウソクを使うところ、全てバターでまかなってるから。香港のビルというビルに設置されている「小心地滑（滑るから気をつけて）」看板を置くのにこれ以上うってつけな場所はない。



獣姦の絵とか子供泣くレベルでいかちいオブジェとか、チベット仏教ってビジュアルがエグ

くて、普通仏教と聞いて想像するようなシットリした感じとはだいぶかけ離れて面白い。が、寺はもう結構。同じく飽き傾向だったカズ君と、迅速に見学を済ませてあとの２人を待つ。うちらの他に誰もいない。一人で来て一日ボケーとくだらない妄想をするには良い。

　夜、シガツェの街に到着。我々の中では、中国内では「dicos（チキン系ファーストフード）があれば都会」という認識だが、ここにもばっちり進出中。だが、ホテルにチェックインし、９時過ぎに外に出たら真っ暗もいいとこで、かろうじて開いてた食堂に入ったら、注文するものするもの「んー、できない……いや、これは、ある……」と曖昧オンパレード。
「何でもいいから出来る物をください」
　客としてこれ以上にない謙虚な注文で、なんとなく出てきた料理は、タイヤみたいな肉が乗ってたり、冷凍焼け確実のモモだったりしたけど、文句言いながらも楽しい食事だった。
　テレビではいつも通り、「小日本人を倒せ！」風味のドラマ。いつもどっかしらのチャンネルでやってるこういうの。もういい、気にしない、成都は大変そうだが、ここはチベットだし。安全だし。多分。

　さー、明日はエベレスト見ちゃうんだろうか。
　エベレストとチョモランマが同じもんだということを、つい最近知ったちびろっくのレポート、お楽しみにー。

チベットぶっちぎり日記 vol.2《チベット・シガツェ～エベレストベースキャンプ編》

　翌朝。宿向かいの市場が、思いのほか賑わってたので、手の空いた者から順に散策に出かけた。
　なかなか戻らないカズ君を呼びに行ったヒデ君が、チベタン女性の売り子に、首をしめられかねない風情で迫られていた。何も買わずに無事釈放されたが、戻って来たカズ君は、「腕掴まれて、離してくんないからさ～」と、ペンサイズのマニ車をぐるぐるやっている。被害者２名。チベタン女性の商魂＆腕力まざまざと見せつけられたね、朝っぱらから。

　車に乗り、チェックポイントの所で車が止まると、化石売りのガキがたかってきた。

　ありがちこういう写真。
「みんな純粋で、眼がキラキラしてたよ！」とか言っときゃいんだろうけど、キラキラどころかこいつらはあたしの出っ歯を見て爆笑している最中。人の出っ歯を笑う前に顔を洗え！

　途中、展望ポイントで下車する。標高けっこーあるからフリースとパーカーでも寒くてしょうがないこの場所で、やっぱりどうして欧米は半袖なんだよ！　ここで半袖だったら、ここ最近の日本の夏なぞ、服、着れないだろう。てか、どうするんだろう生きていけるんだろうかと本気で首をひねる。まあ、どうでもいいや。

　火星（イメージ）みたいな風景が続く中、突如街が現れたりする。植物もロクに生えてないこんな土地で、よく人間が住めるもんだ。万が一アンドレア・ピルロかダイムバッグ・ダレルに求婚されたとしても、愛の巣を構える地がここだとしたら、あっさりお断りする……いや、うーん。どうかな。でへへ。←妄想中

夜８時ごろ、エベレストベースキャンプに到着。エベレストベースキャンプとは、「エベレストに登るすごい人たちが、ベースにするキャンプ場」である。なのでエベレストがすぐ近くなのである。

しかし今日は雲が多い。ヤツのその姿のほんの一部だけが見えた、気がする。チラ見せにハアハアする人の気持ちがよくわかる。もっと見せろ。明日、晴れろ。晴れれ。晴れやがれ。

ベースキャンプにズラリと並ぶ、モンゴルのパオ風のテントは１泊４０元。このおとんとおかんは、ガイドさんの実のおとんとおかん。英語はあんま通じないが、サービス良し。笑顔良し。問題無し。

ここはもう標高５０００越えてて真冬なみの寒さ。多分標準の日本人よりはるかに寒がりなこの４人だったが、夜中は月がキレイだった等の理由により、屋外でレイブまがいのことをした。そして標高５０００メートルで踊ったら、ビール１本で吐きかけた。

布団に入ったら、おかんがもう一枚毛布をかけて、ギュッとしてくれた。ギュッと。久々のギュッに安心感。

夜中トイレ（テント裏）に出たら、空一面星だった。完全に雲晴れた。明日は見えるな、エベレスト。

【旅日記】チベットぶっちぎり日記 vol.3《チベット・エベレストBC～ジャンム一編》

　あんまり日頃の行いがいいとは言えない我々に、なぜか天は味方して翌日は見事な晴天。

　チベットで麺て言ったらいつもモソモソしか出て来なかったのに、こんな美味しい麺があるなんて知らなかった早く言ってよって程、美味しいトゥクパという麺を食べたのち、更に先にあるベースキャンプへ。
　バスで10分上がって、いつもの中国検問を受けたのち、丘へ。丘を越えて。その先に。
　ヤバイ。見えた、世界最高峰。
　何となく流れで来てしまったチベットにて、今、生エベレストを拝んでいるよ。生エベレストって高級デザートのような響きだよ。

　テンション上がりまくりの写真撮りまくり。４人それぞれソロでの写真は、エベレストバックでマニ車をスナップしたり寝てみたり放〇してみたり読書してみたり。

「早く早く～！」
　タイマー設定時間を間違えて間に合わないという、８０年代の漫画のオチみたいな一コマも撮れて大満足。うちら以外に誰もいなかったってのもこれ幸い。この景色、貸し切りってすごい贅沢。だが、念のため確認してみると、こんな僻地でも、携帯の電波はガッツリ入る！　さすが喋ってなきゃ死ぬ中国人！　ああ、高額な請求を恐れず、「チョモランマなう」しときゃよかったな。

　ベースキャンプのど真ん中に、偉そうにそびえてる中国国旗、引っこ抜いてチベットの旗さしてやろうかなんて言ってたけども、我々がこうして（比較的）快適に旅ができているのは、漢民族さまさまな訳で。ま、ん、複雑ですけど来れてよかった。

　テントのママとパパに別れを告げ、ネパール国境の街へ。

　他の惑星か！

　人工物がどこにも見えない大地の悪路を、日本車（と、ドライバーの腕）の性能の素晴らしさで乗り切る。いつの間にか周囲の風景は鬱蒼とした山ん中、雲ん中。さっきまでのカラッカラの大地は夢だったのか？

　なつかしい丹巴みたいな渓谷をしばらく行きますと、入りました国境の街、樟木（ジャンムー？　ダム？）。国境の街らしく、辺境のくせしてピンクなネオンがちらほら。まずは健全にアウトドアショップで毛布など物色したのち、宿隣のDJ's Barと銘打った店に勢いで突撃。

　大方の予想どおり、DJなぞやっぱりいない！

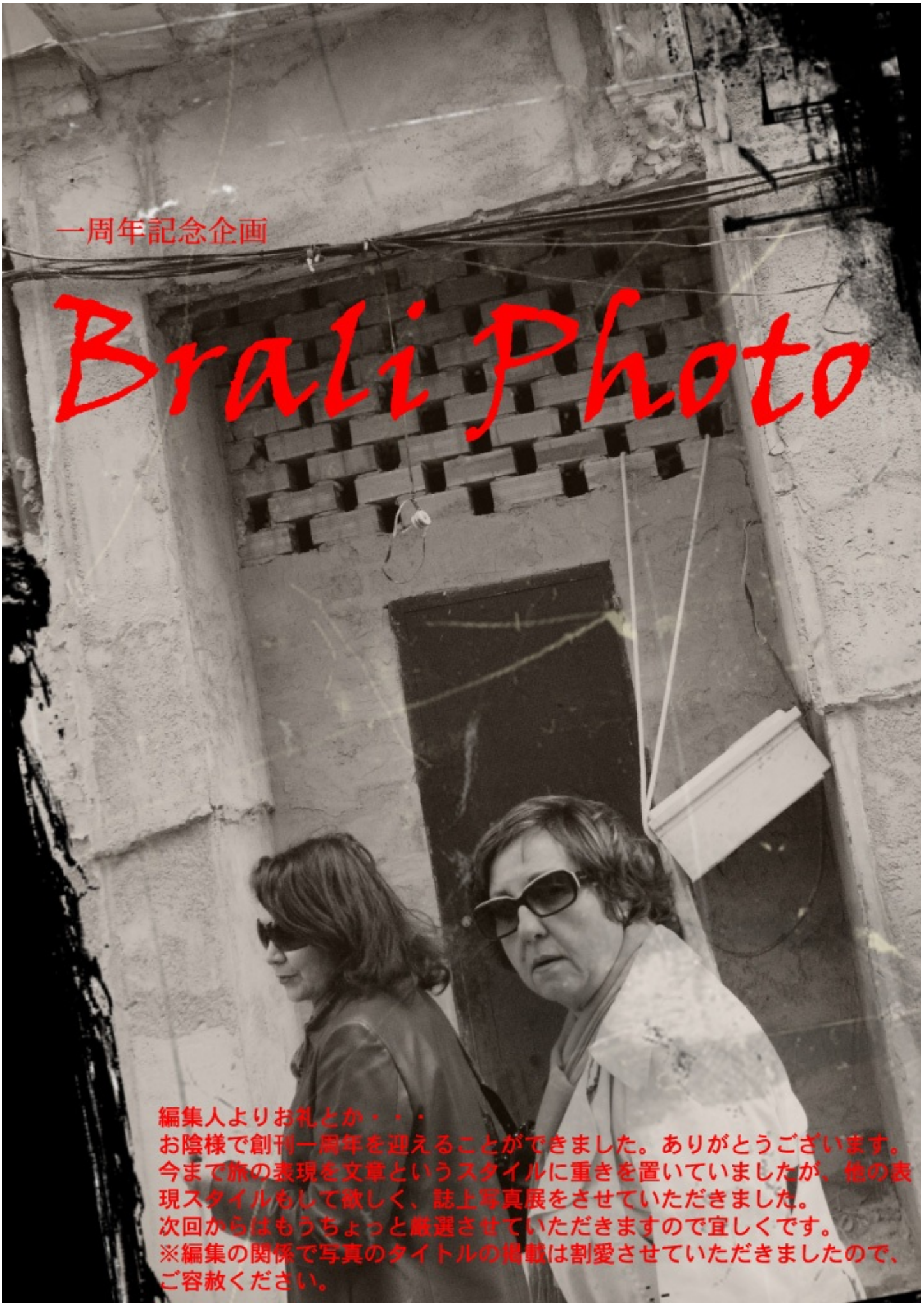
　１瓶１０元という、良心的な料金設定なのを良いことに、チベットと西洋の四つ打ちディスコソング（CD）でノリたいのにノリきれない中国人をニヤニヤしながら眺める我々。一瞬フロアでドリフダンスを試みるも、お姉ちゃんに苦笑いされたためやがて撤収。えきぞちっくな顔立ちのお姉ちゃんも増えて、おお、もうすぐそこはネパールなんだなとじんわり。

　久々に夜遊びしたが、なぜか夜遊びした気がしなかった、中国ラストナイト。この微妙さが、また中国らしい。さよなら長らくお世話になった中国。

※翌朝国境越え荷物検査の際、中国側の係官があたしの地球の歩き方の地図部分を破り取りやがった。理由は、「中国の地図なのに台湾が描かれていないから」。中国南西部のガイドブックに台湾が描かれるわけないじゃん、アホ！

一周年記念企画

Brali Photo



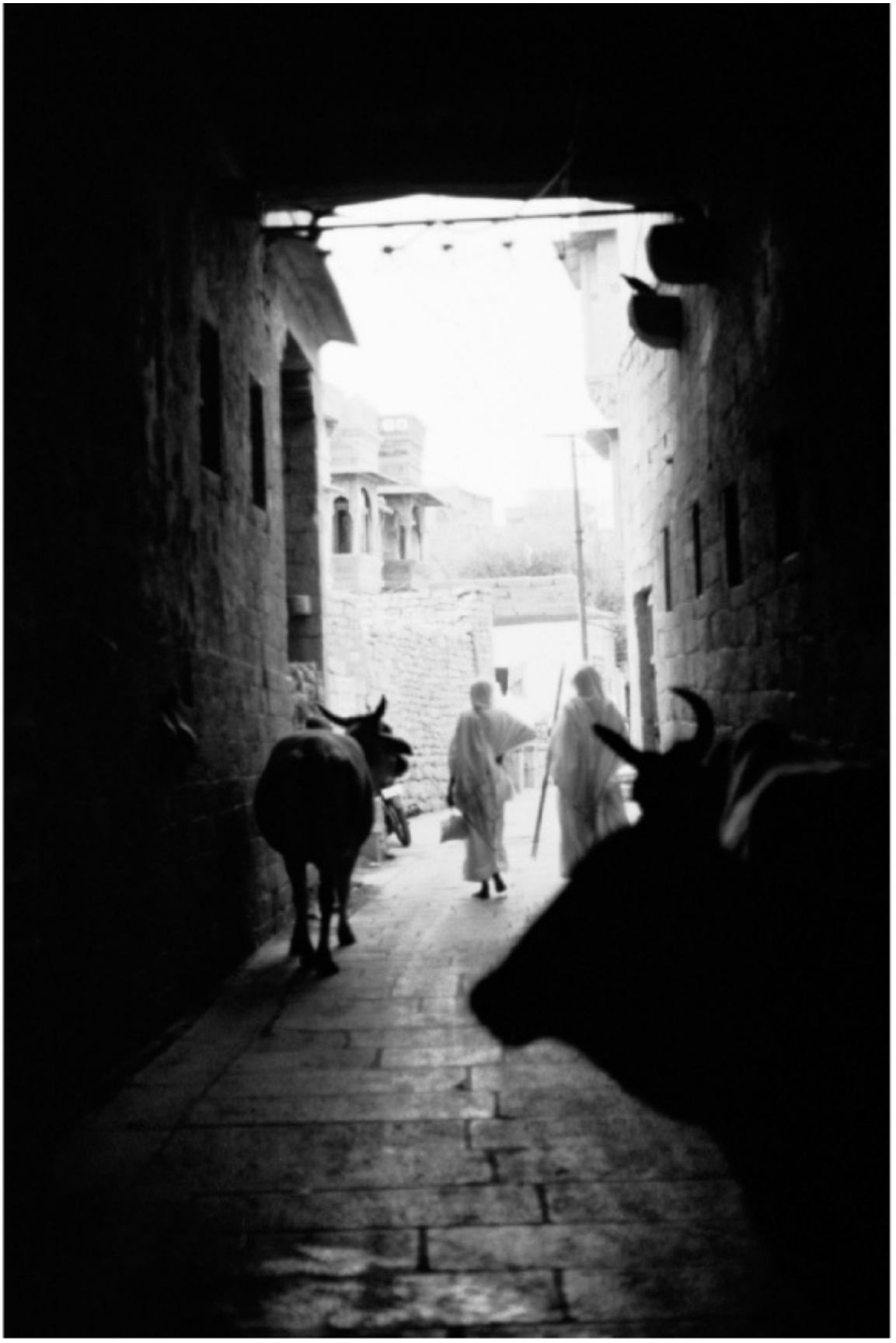
編集人よりお礼とか・・・
お陰様で創刊一周年を迎えることができました。ありがとうございます。
今まで旅の表現を文章というスタイルに重きを置いていましたが、他の表現スタイルもして欲しく、誌上写真展をさせていただきました。
次回からはもうちょっと厳選させていただきますので宜しくです。
※編集の関係で写真のタイトルの掲載は割愛させていただきましたので、ご容赦ください。

■Photographer
AKIYOSHI　YAMASHITA
■Profile
世界屈指の人見知り。大学を休学して世界を放浪。休学１年目は、オーストラリアでワーホリ。２年目は世界一周！！
大学を２年休学中。。。。。。。。将来と髪型が不安定です。
ブログhttp://ameblo.jp/akiyoshiyama/

■Photographer
yukykote
■Profile
中学、高校と東南アジアで育ち、旅が好きになったのは日本に帰国後、大学3年になった夏。東南アジア、中東、ヨーロッパと周り、旅の楽しさに目覚めた。まだ知らない世界へこれからどんどん行ってみたいと思う。

■Photographer
夏目ひらら
■Profile
別冊マーガレット系列で漫画を執筆。19才の時にドイツへ行って以来すっかりカルチャーショックフェチに。単行本『後輩Aの告白』で、巻末にカンボジアで不良僧侶に出会った時のことを漫画にしています。ブログ『ヒララゴト』

■Photographer
Takumi　Camera
■Profile
「俺はこのままでいいのか？」と、突発的に会社を辞めて旅に出ました。行先は世界の屋根、ネパール。人の優しさ、酷い現実や、神々の世界、いろんなものが落っこちているネパールに
感動して、今を生きる力をもらいました。



■Photographer
兼清俊太郎（@kanekitter）
■Profile
高等遊民大学4年生。3年前は年間100冊読書＋書評、一昨年はロンドンで8ヶ月間の語学留学、去年は8ヶ月間のアジア11カ国83都市の一人旅。これらの経験を生かして大学生、進学予定の高校生に向けた文章を執筆中。

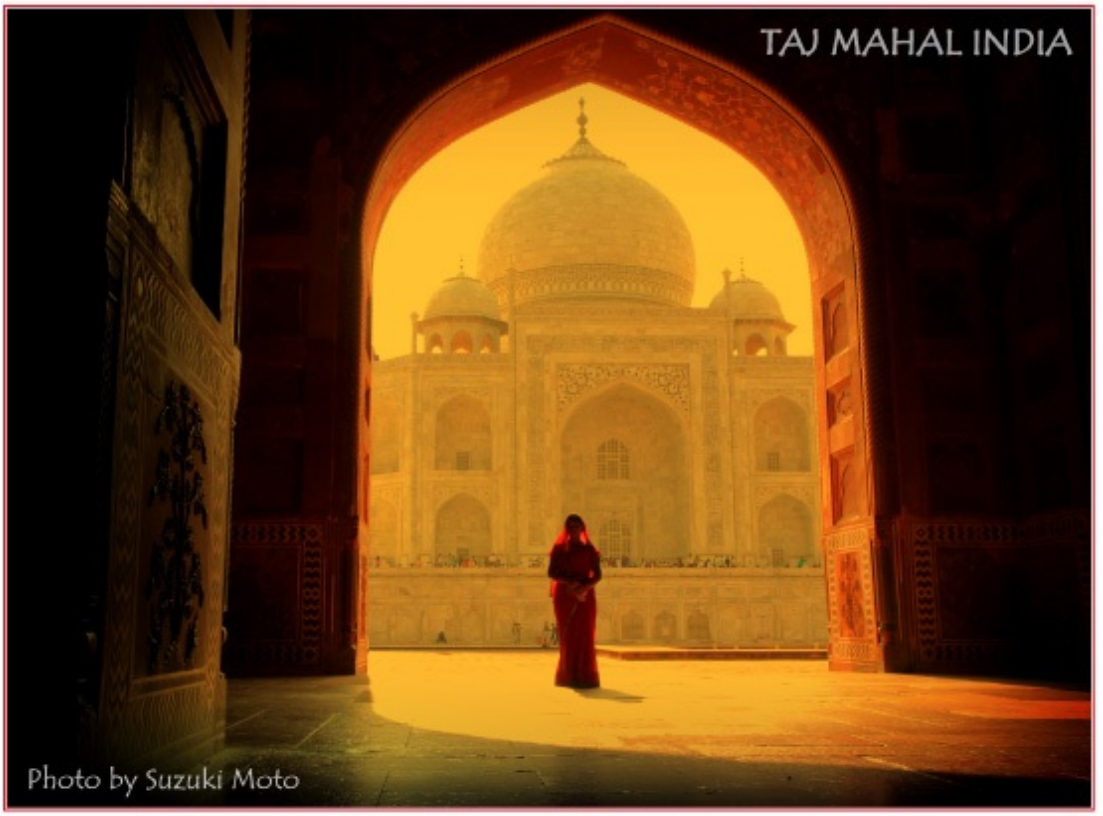
■Photographer
YUSUKE
■Profile
『海と山とカメラが好きなB型の元薬剤師。世界の絶景を求め、2010.10.10より旅に出る。北中南米→アフリカ→現在、ヨーロッパ周遊中！
Blog：「FreeFlowLife」http://ameblo.jp/solitary-cloud-el-mar/
Facebookページ：http://www.facebook.com/FreeFlowLife』

■Photographer
船橋証考
■Profile
28歳、銀行を退職後、世界一周を達成。もう一周しようかと思案中。
http://www.facebook.com/masataka.funahashi
http://journeyatw.blog58.fc2.com/

■Photographer
竹田　悠
■Profile
サラリーマンバックパッカー。連休を使ってアジア、欧州をメインに廻っていました。最近は中東やアフリカ方面へ挑戦中。カメラ暦は約2年。
SONYのα55を愛用しています。

■Photographer
田中美咲
■Profile少しでも多くの人が心からの幸せであれる世界を創りたい。
渋谷で働くバックパッカー、田中美咲です！
▽Keyword：
バックパック旅(221日6大陸12旅26カ国63都市)/瞑想修行(Vipassana)/全米NLP認定コーチ/LABプロファイル資格取得/前世はインドの姫/三軒茶屋シェアハウス
▽blog：
http://ameblo.jp/awesome-misaki/
▽三軒茶屋シェアハウスBLUEHOUSE：
https://www.facebook.com/sharehouse.BlueHouse

■Writer&Photographer
ワールドハッカー
■Profile
元バックパッカー、現在は職業ハッカー。
ブログ『World Hacks!』にて海外旅行関連の情報を毎日発信しています。
http://bit.ly/WorldHacks
Brali Vol.1からVol.7まで7連続記事掲載。



■Writer&Photographer
鈴木モト
■Profile
男性　静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84（100M）
美容師免許、管理美容師免許取得。
MIXIコミュニティー、「鈴木の書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。
http://mixi.jp/view_community.pl?id=3502328
現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。
ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」
http://ameblo.jp/roundtheworld200130/

■Photographer
Chibirock
■Profile
Sigur RosとBeirut贔屓のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
http://blog.chibirock.net/

作者・情報提供者一覧

【作者・情報提供者一覧】

表紙写真
目次写真
エッセイ　旅ときどき・・・　本文＆写真
特集インド　中表紙写真
鈴木モト
男性　静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84（100M）
美容師免許、管理美容師免許取得。
MIXIコミュニティー、「鈴木の書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。
http://mixi.jp/view community.pl?id=3502328
現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。
ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」
http://ameblo.jp/roundtheworld200130/

「First Step 旅に出よう！」未知なる道　本文
谷川和哉（Kazuya Tanigawa）
自分の知らない世界に触れたくて、初めてカナダに行ったのが高1。国内外問わずウロウロと。多くの街に行くよりは、一つの街でじっくりと人に触れる旅がしたい。現在は、技術者として腕みがき、翻訳ボランティアをしながら、エネルギー問題の解決方法を考える日々。誰か一緒にやりましょう。100人100旅；第１、３、５弾執筆者。100人100旅を通して東京、名古屋、京都、熊本、函館、イタリアで写真展を開催。個人的にも名古屋の旅人と共に写真展を開催する。
Twitter；ponn_kazuya

「First Step 旅に出よう！」一歩踏み出す勇気　本文＆写真
船橋証考
銀行を退職後、世界一周を達成。もう一周しようかと思案中。
http://www.facebook.com/masataka.funahashi
http://journeyatw.blog58.fc2.com/

「First Step 旅に出よう！」リアルRPGの冒険　本文＆写真
ワールドハッカー
元バックパッカー、現在は職業ハッカー。
ブログ『World Hacks!』にて海外旅行関連の情報を毎日発信しています。
http://bit.ly/WorldHacks
Brali Vol.1からVol.7まで7連続記事掲載。

「First Step 旅に出よう！」今日が人生最後の日なら、今日することは自分がしたいことだろうか？　本文＆写真
岡部能直
世界の絶景や世界遺産を中心に約2年間で世界一周。南極大陸を含む七大陸、60カ国以上、150世界遺産以上訪問した経験を活かし、世界各国の旅コラムを執筆中。

私がフィリピン英語留学をする理由　本文＆写真
大谷　浩則
猪突猛進のトイレットパッカー。現在世界2周目！フィリピン留学からスタート。
旅のPodcast配信しています！
Podcast:ウィーリーのバックパッカーラジオ　世界一周アワー
http://tabitabi-podcast.com/sekai1/
Blog:ウィーリー　海外放浪×地球一周×フィリピン留学　～実況！旅人アワー～

http://ameblo.jp/hero23/
Twitter:@taniwheelie

Brali Biz 「旅」×「ビジネス」 本文＆写真
たびえもん
http://tabiiku.org/tabiemon.html
メルマガ http://melma.com/backnumber_185626/
たびえもんの創業理念は「旅育」です。旅には好奇心や挑戦心を育てるチカラがあります。国際交流や異文化理解を育むチカラがあります。 未来を担う若い世代に旅のチカラを伝えることで、世の中を元気にします！
木舟 周作（きふね しゅうさく）
株式会社たびえもん代表取締役。
総合旅行業務取扱管理者。旅育コンサルタント。自転車世界一周達成。
五大陸およそ70ヶ国を訪問の経験と、旅行業のプロの知識を活かし、子連れ旅行＆旅育を推進中。
木舟 雅代（きふね まさよ）
株式会社たびえもん取締役。
グラフィックデザイナー⇒アジア放浪⇒テキスタイルデザイナーを勤めたあと、
「インドと同じ味のチャイを出してくれるお店ってないな…」
ふとしたつぶやきがきっかけで、カフェ出店となりました。

Chibirockの旅はくせもの 本文＆写真
アジア漂流日記 本文＆写真
Chibirock
Sigur RosとBeirut贔屓のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
http://blog.chibirock.net/

HANGOVER in the WORLD 「ウズベキスタンの酒」 本文＆写真
三矢英人
大好きだった世界史の授業に出てくる数多の遺跡・建造物を自分の目で見るため海外へ旅立ち、その魅力にはまる。世界中の遺跡・建造物・自然・酒・飯を堪能するべくいつかは世界一周、と思いながら日々次の旅への思いを馳せるリーマンパッカー。
Twitter:hideto328
http://twitter.com/hideto328

旅人からの伝言 「特集 インド」インド旅行到着初日＊ 本文＆写真
嶋津亮太
Cafe Bar Donnaという店を経営。
劇団PRIMALの主催。
ブログ DONNA THE PRIMAL
http://premadonna.blog108.fc2.com/

旅人からの伝言 「特集 インド」体験をもって理解すること 本文＆写真
田中美咲
少しでも多くの人が心からの幸せであれる世界を創りたい。
渋谷で働くバックパッカー、田中美咲です！
▽Keyword：
バックパック旅(221日6大陸12旅26カ国63都市)/瞑想修行(Vipassana)/全米NLP認定コーチ/LABプロファイル資格取得/前世はインドの姫/三軒茶屋シェアハウス
▽blog：
http://ameblo.jp/awesome-misaki/
▽三軒茶屋シェアハウスBLUEHOUSE：

https://www.facebook.com/sharehouse.BlueHouse

一本の糸で世界をつなぐチャリの旅　本文＆写真
Connection of the Children
http://coccoccoc.web.fc2.com
田澤儀高
横浜国立大学大学院音楽教育専攻一年。ピアノと自転車旅が大好き。小さい頃からチャリで遠出するのが趣味。将来は学校の先生になって音楽の素晴らしさを子どもに伝えたい。そしてユーラシア横断の旅で感じてきたことも。
加藤功甫
横浜国立大学大学院一年休学中。保健体育科専攻。出会いに感謝し、日々邁進中！つながるって楽しい！！自転車旅/ボルダリング/生花/写真/読書/料理…

自炊派の手料理　本文＆写真
谷津 達観(やつ たっかん)
料理一筋！懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、世界一周の旅に！
現在、夫婦で旅に出て９ヶ月。一年の予定で現地の食材や料理を学びながら旅をしています。食べるのも、作るのも大好き！
「家から徒歩１年☆たっかんとじんみ２人世界一周」
http://ameblo.jp/worldjourney2010/

エッセイたびたべ　本文＆写真
沢井ブルース
旅する武術家　空手では国際大会優勝経験アリ
現在は東南アジアを中心に放浪及び武者修行中
ヘタクソな文章ではありますが、気楽に読んでもらってBraliの中の「箸休め」的な存在になれたらなーと思ってます
人生、酒と泪と旅と武術　梵我一如　覚有情

【Brali　Photo(誌上写真展出展者一覧)】
AKIYOSHI　YAMASHITA
世界屈指の人見知り。大学を休学して世界を放浪。休学１年目は、オーストラリアでワーホリ。２年目は世界一周！！
大学を２年休学中。。。。。。。将来と髪型が不安定です。
ブログ　http://ameblo.jp/akiyoshiyama/

yukykote
中学、高校と東南アジアで育ち、旅が好きになったのは日本に帰国後、大学3年になった夏。東南アジア、中東、ヨーロッパと周り、旅の楽しさに目覚めた。まだ知らない世界へこれからどんどん行ってみたいと思う。

夏目ひらら
別冊マーガレット系列で漫画を執筆。19才の時にドイツへ行って以来すっかりカルチャーショックフェチに。
単行本『後輩Aの告白』で、巻末にカンボジアで不良僧侶に出会った時のことを漫画にしています。ブログ『ヒララゴト』

Takumi　Camera
「俺はこのままでいいのか？」と、突発的に会社を辞めて旅に出ました。
行先は世界の屋根、ネパール。
人の優しさ、酷い現実や、神々の世界、いろんなものが落っこちているネパールに
感動して、今を生きる力をもらいました。

兼清俊太郎（@kanekitter）
高等遊民大学4年生。3年前は年間100冊読書＋書評、一昨年はロンドンで8ヶ月間の語学留学、去年は8ヶ月間のアジア11カ国83都市の一人旅。これらの経験を生かして大学生、進学予定の高校生に向けた文章を執筆中。

YUSUKE
『海と山とカメラが好きなB型の元薬剤師。世界の絶景を求め、2010.10.10より旅に出る。北中南米→アフリカ→現在、ヨーロッパ周遊中！
Blog：「FreeFlowLife」http://ameblo.jp/solitary-cloud-el-mar/
Facebookページ：http://www.facebook.com/FreeFlowLife』

船橋証考
銀行を退職後、世界一周を達成。もう一周しようかと思案中。
http://www.facebook.com/masataka.funahashi
http://journeyatw.blog58.fc2.com/

ワールドハッカー
元バックパッカー、現在は職業ハッカー。
ブログ『World Hacks!』にて海外旅行関連の情報を毎日発信しています。
http://bit.ly/WorldHacks
Brali Vol.1からVol.7まで7連続記事掲載。

竹田　悠
サラリーマンバックパッカー。連休を使ってアジア、欧州をメインに廻っていました。最近は中東やアフリカ方面へ挑戦中。カメラ暦は約2年。SONYのα55を愛用しています。

田中美咲
少しでも多くの人が心からの幸せであれる世界を創りたい。
渋谷で働くバックパッカー、田中美咲です！
▽Keyword：
バックパック旅(221日6大陸12旅26カ国63都市)/瞑想修行(Vipassana)/全米NLP認定コーチ/LABプロファイル資格取得/前世はインドの姫/三軒茶屋シェアハウス
▽blog：
http://ameblo.jp/awesome-misaki/
▽三軒茶屋シェアハウスBLUEHOUSE：
https://www.facebook.com/sharehouse.BlueHouse

鈴木モト
男性　静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84（100M）
美容師免許、管理美容師免許取得。
MIXIコミュニティー、「鈴木の書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。
http://mixi.jp/view community.pl?id=3502328
現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。
ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」
http://ameblo.jp/roundtheworld200130/

【協力】
向井通浩
JAPAN BACKPACKERS LINK 代表・運営管理者 。「ハニートラップ研究所」所長。タイマッサージ依存症。ホワイト餃子。バックパッカー新聞編集長
http://backpackers-link.com
http://www.mag2.com/m/0001521550.html

小田奉路
海外起業家's EGG主宰

http://worldsegg.com/
http://archive.mag2.com/0001295311/index.html

【広告】
カオサン東京ゲストハウス
http://www.khaosan-tokyo.com/ja/

Maison D'hote Amande chez noriko
http://amandecheznoriko.web.fc2.com/

編集後記

編集後記

読者の皆さんはもとより、記事を投稿情報を投稿写真を投稿いただいた皆さんのお陰でBraliも一周年を迎えることができました。本当にありがとうございます。
Braliもヨチヨチ歩きから少しは成長したかと自負しております。

今後も皆さんが旅で得た経験などを表現しシェアするメディアとしてお役に立ちたいと思ってます。今後共応援お願いします。

よりお役に立てるよう、サイトを立ち上げる準備もしています。
こちらも楽しんでただけますよう鋭意製作中です。

Brali Bizからセミナーを始める企画も準備中です。
「旅、インバウンド、アウトバウンド、海外」等のキーワードで独立や週末起業や副業など検討の方向けに、その方面の識者や経験者などを講師に迎え、セミナーを企画してます。

皆さんのご感想などもお待ちしてます。ちょっとしたメモ程度でもかまいませんので、感じたこと気づいたことなどお送りください。
bralimagazine@gmail.com

次号予告（２０１２年８月２５日発行予定）

次号予告（２０１２年８月２５日発行予定）

■テーマ「大沈没」
■Brali Biz 「旅」×「ビジネス」
■旅で使えるデジタルアプリ
■HANGOVER in the WORLD
■Chibirockの旅はくせもの
■旅人からの伝言 「特集　コーカサス」
■トホホな話
■一本の糸で世界をつなぐチャリの旅
■自炊派の手料理
■エッセイたびたべ
■アジア漂流日記
■旅先の変な日本語
■海外ボランティア体験談

記事と情報および写真の募集要項

記事と情報および写真の募集要項

次回のBraliの発行予定は８月２５日です。
下記の記事や情報をお気軽にお寄せください。ご応募いただきました中から厳選させていただきます。

★記事および情報
■テーマ「大沈没」沈没したことあり余すか？長期旅行者にありがちな一箇所の街や宿に長めに留まるいわゆる沈没。なぜ沈没したか、なぜその街、宿だったのか、そして何をして何を思ったか。色んな沈没をお待ちしてます。
→１５００字から２０００字程度
■旅で使えるデジタルアプリ　→旅で役に立ったアプリを教えてください。
■HANGOVER in the WORLD　→旅先での酒や酒場にまつわるショートコラムをお待ちしてます。
■旅人からの伝言 特集 コーカサス
→１５００字から２０００字程度
■変な日本語→海外でよく目にする「変な日本語」。写真とどこで撮影したかを教えて下さい。
■海外支援団体などの団体さん、活動PRや支援募集などBraliに無料掲載いたします。取り組みなどのPRなどにご利用ください。
■海外ボランティアツアーや海外青年協力隊参加などの体験談を大募集しています。旅行では体験できないことや、秘話などをお待ちしてます。

★写真
■Brali表紙用写真
コーカサスで撮影された写真を募集します。

記事投稿および投稿に関するご質問はメールにてお願いします。
bralimagazine@gmail.com

投稿フォーム
http://bralimagazine.blogspot.jp/2011/11/blog-post.html

奥付

Brali

●公式サイト

http://brali.net

●公式ブログ

http://bralimagazine.blogspot.com/

●Facebookページ

http://www.facebook.com/Bralimagazine

●mixiページ

http://p.mixi.jp/brali

●twitter

http://twitter.com/2moratorium

編集：くりはらのぶゆき

発行：くりはらのぶゆき